

年報

津山 弥生の里

第3号（平成6年度）

1996

津山弥生の里文化財センター

序

「年報 津山弥生の里」も今回で第3号の発刊となりました。

国内では、経済活動の停滞から財政事情の大転な見直し、金融機関統廃合の進行、市場自由化に伴う生産体制・消費状況の変化、そしてこれらに起因する雇用調整等々大きな曲折の流れの中で各自が身にしみて色々と思慮させられることがありました。

ところで、誠に、ちっちゃな私ごとの体験談ですが、町内会のゴミ置き場建設時に隣接する無縁墓のいわくある樹木伐採を関係者一同がためらっている折り、私はなんの抵抗感もなく除伐しました。これぞ埋蔵文化財発掘業務で修得した正しい知識が迷信とか、怨念とかをぐく自然に打破した行為そのものであります。

これからも開発の中で埋蔵文化財の保護・調査研究の充実に、津山弥生の里文化財センター職員がより高度な知識・技術を持って、確かな成果を上げよう努力いたしております。

今後も関係者の方々、市民各位のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

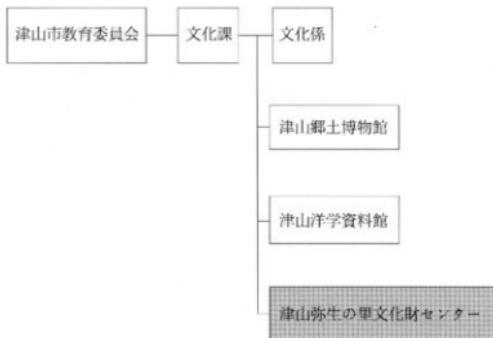
平成8年3月31日

津山弥生の里文化財センター

所長 神田 久遠



津山弥生の里文化財センター機構図



津山弥生の里文化財センター職員配置（H 8. 3. 31現在）

所長	神田 久遠
次長	中山 俊紀
主査	安川 豊史
"	行田 裕美
主任	青木 隆子
主事	小堀 利幸
"	坂本 心平
嘱託員	野上 恒子
"	岩本えり子
"	江見 祥生
"	家元 博子

目 次

1. 津山弥生の里文化財センター事業概要	1
(1) 展示事業	1
a. 入館者数	1
b. 啓発・普及活動	3
c. 寄贈資料	3
(2) 埋蔵文化財発掘調査	4
平成6年度調査一覧	4
(3) その他の事業	4
(4) 調査の概要	6
a. 美作國府跡（藤森地点）の調査	7
b. 岡道東遺跡発掘調査報告	10
c. 大野木塚古墳墳丘測量調査報告	26
d. 正仙塚古墳測量調査報告	35
2. 資料紹介・研究ノート	40
(1) 津山の弥生土器1（壺形土器）	41
(2) 「日上和田古墳」増補	45
(3) 長畠山2号墳出土の資料について	47
(4) 津山城今昔	58
(5) 土器復元雑感	62
(6) 未来のために	63

例　　言

1. 本書は、津市教育委員会・津山弥生の里文化財センターが平成6年度に実施した事業概要についてまとめたものである。

1. 埋蔵文化財の発掘調査は、中山俊紀、安川豊史、行田裕美、小郷利幸、平岡正宏、坂本心平、庶務を青木睦子、出土遺物の整理は野上恭子、岩本えり子、家元博子、民俗資料の整理は江見祥生が担当した。本書の執筆は各担当者がおこない、編集は小郷が担当した。



1. 津山弥生の里文化財センター事業概要 (1) 展示事業

◆入館者数

当館が開館してから、5年目を迎えました。入館者数は延べ36,734人に達しています。（平成6年度現在）しかし、高・大学生、老人は減少の傾向にあり、今後の利用者数の増加が望されます。

昨年度の当センターへの入館者数は下表のとおりです。

総利用者数内訳（平成6年度）

区分/月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年間合計
一般	368	605	403	283	401	322	345	309	121	134	168	178	3637
高・大	26	28	2	11	23	12	35	22	3	4	8	15	189
小・中	253	766	69	312	325	56	474	254	4	21	196	92	2822
老人	10	24	5	8	19	40	5	8	5	4	8	6	142
合計	657	1423	479	614	768	430	859	593	133	163	380	291	6790

◆民俗資料について

当センターでは、かっての「東吉田民俗資料館」から引き継いだ資料（主に明治、大正、昭和40年頃まで）と、新たに寄贈していただいた資料や、復元修理した資料、あるいは新規作成の品など多数を展示、収蔵し、また必要に応じて資料の入れ替えを行っています。

今年度も従来からの方針『利用者の方に解りやすい収蔵、展示』をモットーに、資料を系統立てて、第二展示室及び第四収蔵庫内に展示、収蔵しました。

今年度は、

- ①昨年度の続きとして、『食の用具』の「調理・調整具」、「嗜好品用具」、「飲食用具」のコーナーを設け、解る範囲での品名や簡単な説明を明記しました。
 - ②農機具のコーナーを設け、様々な用具を『耕起具』から『脱穀機』まで一部ですが歴史的にも順に並べ、農機具の歴史の変化が一目で解るようにしました。
 - ③別に、「竹製品、竹細工」、「葉細工」のコーナーを設け、各製品を集中して展示し、簡単な説明を付けました。
 - ④展示室に、津山名産の「作州餅」のコーナーを設け、簡単に今昔の変遷を示しました。
- うれしいことに、来観者の皆様からは、随分と好評をいただいております。また、貴重な御意見も数多く戴きました。



◆民俗資料紹介

運搬用具の中の、「キオイコ」（ショイコ）と呼ばれる物で、当センターには7つのキオイコがあり、これを枠の形態のうえから分けてみると、

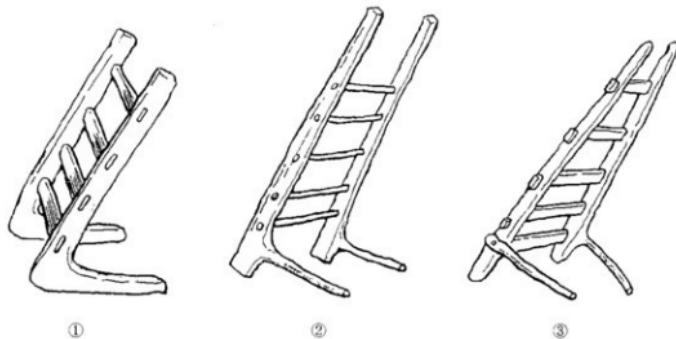
- | | |
|-----------------------------|---|
| ①枠全体が一本の自然木を二つ割にして作られているもの。 | 1 |
| ②枠が二本の自然木を利用して作られているもの。 | 1 |
| ③枠の一方のみが一本の自然木で作られているもの。 | 1 |
| ④枠の脚が差し込み固定式になっているもの。 | 3 |
| ⑤木の枠に鉄製の脚をネジ止めしたもの。 | 1 |

の5つのタイプに分けられます。

また、その材質から見ると、①は松、②、③は桧、④は櫻、松、杉、⑤は桧が使われています。いずれも、背負う側には軽く感じるよう、また変形しにくい材質を選びより多くの荷を積めるように作られています。

特に、自然木を利用した①、②、③は、先人達の〔木〕の性質をよくつかんだ「生活の知恵」を教えてくれます。このうち①は、かなり太い松の材の幹と枝の別れる部分を利用して作り上げてあり、②、③に比べると、格段の立派さです。（下岡左から①、②、③）

先人達の「知恵」は多くのことを私達に伝えています。 （江見祥生）



◆啓発・普及活動

【刊行物】

- ◎『年報 津山弥生の里第2号』
- ◎『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集
- ◎『野村高尾遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第55集
- ◎『美作国府跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第56集

【講演会・研究会】

★第13回 津山市文化財調査報告会

平成7年2月12日（日） 場所 津山市総合福祉会館

講演

「備中高松城の水攻めと美作」 岡山県立博物館総括学芸員 加原耕作先生

調査報告

「美作国府跡の発掘調査」 津山弥生の里文化財センター 安川豈史

「平安時代後期の美作国府」 津山郷土博物館 淡 哲夫

「野村高尾遺跡の調査」 津山弥生の里文化財センター 坂本心平

★美作考古学談話会

第1回5／14（土）美作の古墳（日上天王山古墳について）

第2回7／2（土）古墳の内部主体と副葬品

第3回9／3（土）鉄器

第4回11／5（土）美作の前方後方墳を歩く

第5回1／21（土）古代の鉄のはなし

第6回3／4（土）佐良山古墳群の見学

◆寄贈資料

【民俗資料】

原田 武藏	灰ふご2点、練炭火鉢1点
清泉小学校	薬研1点、ラジオ2点、畜音機1点、レコード241点、カメラ1点、魚具2点



(2) 埋蔵文化財発掘調査

平成 6 年度発掘調査一覧

No.	遺跡の種類及び名称	所 在 地	調査原因	区別	遺構・遺物の有無	報告書の有無
1	古墳 日上天土山古墳	日上417-13	学術調査 発掘調査	竪穴式石室・箱式石棺 鏡・剣	未定	
2	官衙跡 美作国府跡	総社字山崎593-3	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
3	官衙跡 美作国府跡	総社494-3他	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
4	散布地 (中山神社境内)	一宮695-2	便所建設	立会 遺構・遺物なし	無	
5	官衙跡 美作国府跡	総社585-6	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
6	官衙跡 美作国府跡	山北7奉桙12-13	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
7	官衙跡 美作国府跡	山北7才ノ下377-1他	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
8	官衙跡 美作国府跡	小原6-10他	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
9	官衙跡 美作国府跡	総社字客社33-8	住宅建設 発掘調査	建物跡・土塀・溝 古代・中世土器	第56集	
10	官衙跡 美作国府跡	小原字大坪48-2	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
11	集落跡 高尾遺跡	野村892-2	公園造成	発掘調査 住居跡・木棺墓 弱生土器等	第55集	
12	散布地 岡邊東遺跡	福山1334-1他	宅地造成	発掘調査 建物跡・中世土器等	本番	
13	散布地 未定	高野本郷850-3	住宅建設	立会 遺構・遺物なし	無	
14	古墳 長歎山北11号墳	西古川558-2	工場拡張 発掘調査	円墳・木棺 須忠器・鉄器等	第57集	

(3) その他の事業

★埋蔵文化財分布調査

平成 7 年 1 月 23 日～3 月 3 日

津山市高倉・高野山西・下横野地域

★正仙塚古墳の整備報告

正仙塚古墳は、加茂川下流の平野部を見下ろす丘陵上に築かれた全長56mの前方後円墳である。現在、後円部墳頂には兵庫県産の凝灰岩(竜山石)製とされる長持形石棺が露出している。石棺は明治年間に発掘調査され、半円形幕神獸鏡、変形四獸鏡各1面、勾玉、管玉、鐵斧、刀劍、土師器などの他に、人骨2体が出土したと伝えられている。築造の時期は石棺や副葬品から5世紀前半頃と推定されている。本古墳は加茂川流域を基盤とする首長墳と考えられる重要性から昭和40年、津山市指定文化財に指定され今日にいたっている。

しかし、長年草刈り等手を加えないままの状態にあったため、木々がうっそうと生い茂り、古墳への山道はむろん古墳の位置さえも素人では判明しがたい状況であった。さらに案内標示板、標柱も腐食し、ちょうど取り替える時期でもあった。

そこで、文化財センターとしては案内標示板、標柱の取り替えに併せて古墳全域の樹木の伐採及び墳形測量を行った。

以下、概要は次のとおりである。

平成 7 年 1 月 高野山西町内会長に趣旨を説明。古墳及び周辺の地権者 8 名個々に樹木伐採の許可をお願いし快く同意をいただく。

2 月 (社) 津山市シルバー人材センターに樹木伐採の委託をする。短期間に作業終了。

3月 填頂中央部に標柱を設置。
標柱の柱材は（社）津山市シルバー人材センター会員の寄付、着色及び文字は文化財センター職員によるものである。（写真1）

3月～4月 地形測量。測量報告は本年報に稿を改めて詳述している。

5月 案内標示板を2ヶ所設置。従来、古墳の南にあったものが解りにくかったので別の箇所に移動。1ヶ所は県道上横野・兼田線沿いに、もう1ヶ所は、その県道から西へ50m程入った古墳の北側に設置。

案内標示板の作成は（社）津山市シルバー人材センターに依頼。デザイン作成は文化財センター職員による。（写真2・3）

また、4月には鏡を中心とした出土遺物のその後の所在について石棺部の地権者亡近藤庄吉氏のひ孫亡周太郎氏の奥さん、和子さんに話を伺ったが、從来から言い伝えられている内容以外に新たな知見は得られなかった。

最後に、本事業に快く同意された地権者及び地元関係者の方々、及び（社）津山市シルバー人材センターの関係者に心からお礼申し上げると共に、春は山桜が咲き、遠くには那岐山を望むことができる正仙塚古墳が、これを機に文化財として活用されることを願ってさやかではあるが整備の報告とする。

（青木睦子）



写真1



写真2



写真3

(4) 調 査 の 概 要



美作国府跡（藤森地点）の調査

1. はじめに

美作国は和銅6年（713年）に備前国の北6郡を分割して設置された。美作国府跡は津山市総社に位置し、すでに数冊の報告書によりその詳細が明らかとなつてあるが、今回の報告は国府中心部分における民間住宅造成に伴う調査である。



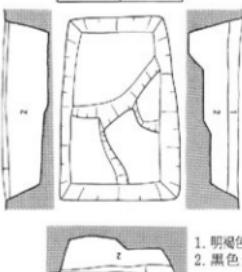
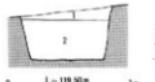
第1図 調査地点位置図

2. 調査の概要

今回の調査は、1992年8月7日（金）に行った。住宅新築予定地の東南隅に、南北約2.5m、東西約1mのトレンチを設定し、地山まで掘り下げた。該当地点の土層は、表土はマサ土でその下層に地山ブロックを含んだ粘土層が約20cm程度あり、さらに下層には黒色土が、地山まで堆積しているという状況であった。上の二層は造成土である。最下層の黒色土が包含層である（第2図）。

3. 遺構（第2図）

トレンチの面積が約6m²と小規模のため、溝あるいは柱穴などの明確な遺構は見いだせなかった。地山の側面は二段の段差がついているが、その性格は不明である。地山の上の埋土は前述のように黒色土である。



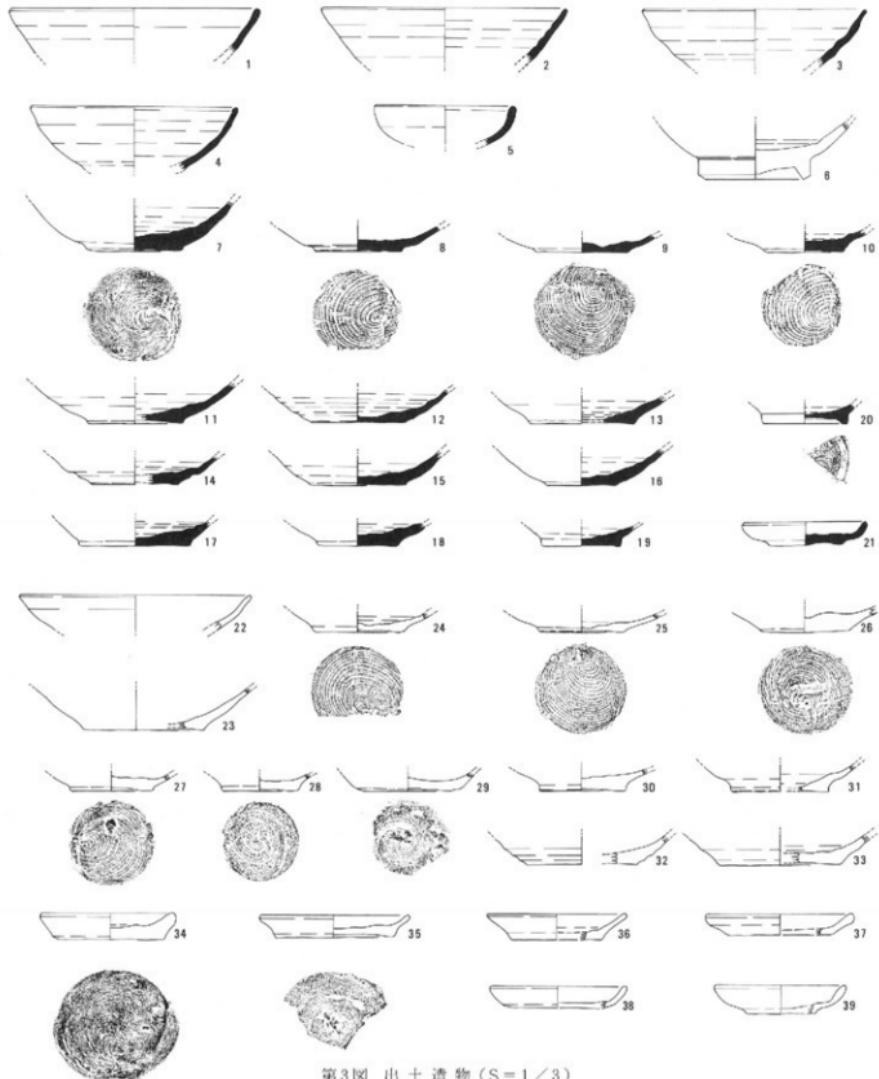
第2図 調査トレンチ平・立面図 (S=1/80)

4. 遺物（第3図）

遺物はすべて下層の黒色土から出土した。遺物の出土量はコンテナ1箱である。そのほとんどはいわゆる中世に位置づけられる土器であり、古代の土器は認められなかった。ただし、若干の古代に位置づけられる瓦（平瓦I A a類（註1））は出土している。この遺物の出土状況は、約50m西に位置する美作国府小林アパート地点の遺物出土状況と比べると対称的である（註2）。

1～4、7～20は須恵器（勝間田焼）の碗である。口径は12.8～15.2cmとばらつきがあり、器高の知れるものはない。底部はいずれも糸切りであり、高台の付く20も糸切りの後に高台を貼りつけている。5は須恵器（勝間田焼）小碗である。口径8.6cmのものである。21は須恵器（勝間田焼）小皿である。口径7.7cmである。底部は回転ヘラ切りである。

22～33は土師器杯である。全体のプロポーションは須恵器碗に比べて浅く、体部が直線的に立ち上がる。また、胎土も砂粒を多く含み、やや粗い。底部の切り離しは24～27は糸切り、28・29はヘラ切りで



第3図 山土遺物 ($S = 1/3$)

ある。その他のものは摩耗により調整は不明である。

34~39は上師器小皿である。口径は8~9cmである。体部が外反気味に立ち上がるもの(34~37)と、内湾するもの(38・39)が認められる。底部は糸切り(34)とヘラ切り(35)がある。

6は白磁碗である。太宰府分類のIV-2類である(註3)。

5.まとめ

以上調査の概要の報告を行った。今回調査した遺構・遺物はともに断片的な資料であり、多くを語ることはできないが、次の2点を示して、まとめとする。

まず、遺物の時期であるが、出土した勝間田焼の年代観からは12世紀後半から末に位置づけられる（註4）。

次に、遺構については、この時期のものは、約100m東に位置する美作国府跡T33調査区（図参照、註5）・日本生命社宅調査区（同、註6）において建物跡・井戸などが検出されている。今回の調査では明確な遺構は確認できなかったが、同時期の遺物の出土は遺構の西方への広がりを示すものと考えられる。

今後、さらに周辺の精緻な調査が望まれる。

（平岡正宏）

（註1）安川豊史「美作国府跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第50集』1994 P.43~45

（註2）平岡正宏「美作国府跡（総社小林アパート）発掘調査概要」『年報津山弥生の里第2号』P.43~49

（註3）森田勉・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」

『九州歴史資料館研究論集』4集1978

（註4）平岡正宏「美作の古代末から中世の土器」『中近世土器の基礎研究IX』1993

（註5）（註1）文献

（註6）安川豊史・板本心平「美作国府跡（日本生命社宅新築に伴う発掘調査）」

『津市埋蔵文化財発掘調査報告第56集』1995

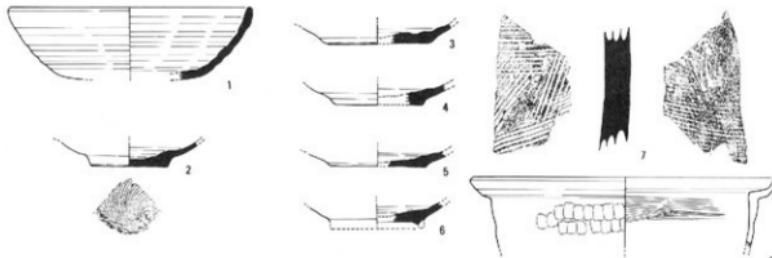
《付録》藤森敏而氏採集の遺物

この遺物は藤森敏而氏より、約20年前に旧藤森宅新築の際に採集したものを見1992年に住宅新築のための立ち会いの折りに寄贈を受けたものである。資料は殆どが細片であり、総点数69点を数える。実測可能なものを紹介する。

1~6は須恵器（勝間田焼）碗である。1は内湾気味に立ち上がる体部であり、口縁は丸くおさまる。2~6は碗底部片である。底部切り離し技法はいずれも回転糸切りである。6は高台付碗底部片である。高台の接地面は欠損している。底部は回転糸切りの上に高台を貼り付けている。7は大甕の胴部の破片である。外面は平行叩き目、内面は崩毛目で、厚さ1.7cmをはかる。かなり厚手のものである。

8は瓦器土鍋である。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は角張り面を持つ。体部外面には指圧痕が顕著に認められ、体部内面は横方向のハケメである。焼成は良好であり、須恵質に近いものである。

以上が図示したものの概要である。



藤森氏採集品実測図 (S=1/3, 8はS=1/6)

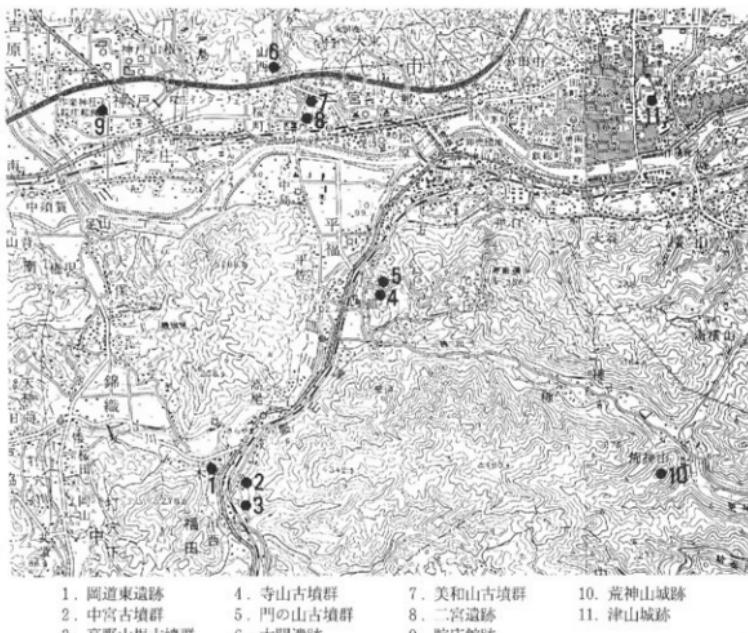
岡道東遺跡発掘調査報告

1. 位置（第1図）

岡道東（おかみちひがし）遺跡は、津山市の南西隅、標高278mの山塊から皿川と倭文川の合流点に向かって北東に延びた標高120mの丘陵上に位置する。平地との比高は約10mである。一帯は佐良山古墳群の所在地として知られており、皿川の対岸には佐良山古墳群を構成する中宮古墳群（第1図2）、高野山根古墳群（同3）などが存在する。

2. 調査にいたる経過

本発掘調査は宅地造成によるもので、造成工事計画の策定の段階に事業主である株式会社ハウジングワーク石原から本委員会に埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。これを受け市教委は平成6年4月19日に予定地内の分布調査を実施した。予定地は畠地となっていて、かなりの削平がなされているものの、須恵器や陶器、磁器といった土器類の散布が認められた。その結果、事前に発掘調査を実施することとなり、平成6年6月10日付で文化財保護法第57条の5第1項の規定による遺跡発見届が事業主から提出され、事業主から依頼を受けた市教委が、原因者の費用負担で発掘調査を実施することとした。調査に先立ち、文化財保護法第98条の2第1項の規定に基づく発掘調査通知を提出した。



第1図 周辺遺跡分布図 (S = 1 : 50,000)

3. 調査経過

調査区は最高所が堤状に土盛（一部石垣が見られる）されているため大きく東西2地区に分けられる（第2図）。西地区については確認調査の結果、ほぼ全面に柱穴などの遺構が多数検出されたため全面調査を実施し、東地区については確認調査の結果柱穴などがほとんど無く、遺構の広がりはないものと判断し全面調査は行わなかった。確認調査は、平成6年6月22日から実施し、そのまま継続して西地区の本調査を行い、多数の柱穴や土壌などを検出した。主な遺構としては建物跡7、柵列1、溝1などがある。遺構検出後写真撮影、測量などを行い、7月14日にラジコンヘリコプターで航空写真を撮影しすべての調査を終了した。その後遺物整理をおこない本報告書を作成した。調査面積は約870m²である。

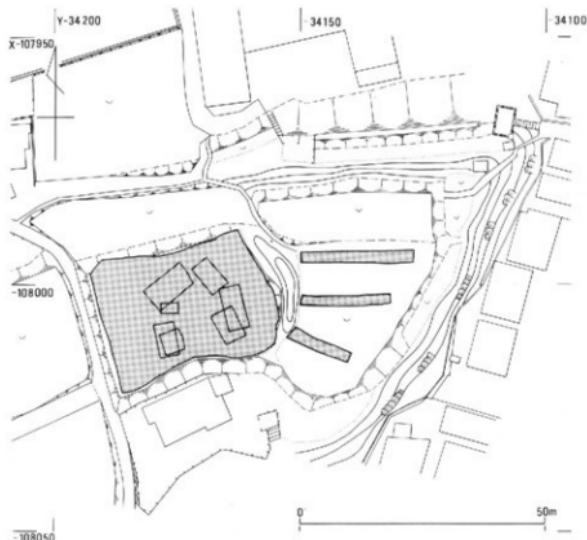
発掘調査は、津山市教育委員会・津山弥生の里文化財センター主査安川豊史、同主事小郷利幸が担当し、発掘作業には津山市シルバー人材センターにお世話になり、また発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々からも御指導、御協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。（敬称略）

（発掘作業）内田優治、加藤文平、河本乙彦、沢 保、柴田陽一、横木 満、平井泉彦、福田昌男、鶴山静馬

（整理作業）野上恭子、岩本えり子、家元博子、平岡正宏

4. 調査の記録

今回検出した遺構は建物跡7（SB1～7）、柵列1（SA1）、溝1（SD1）、土壌1（SK1）などである。その他にも多数の柱穴が存在するため、確認できなかった建物などがあるものと推測される。以下、各遺構・遺物について説明する。



第2図 調査区位置図 (S = 1 : 1000)

建物 1 (SB 1、第4・8図)

調査区の西側、建物2と重複して存在し、棟方向はN-12°-Wである。規模は3×2間で桁行全長695cm、梁間全長422cm、床面積は約29.3m²である。柱穴はすべて円形で柱穴1から須恵器の破片と炭が、柱穴2から陶器片（第8図1）が出土している。須恵器は小片のため器種は不明、1は壺の脚部であるが焼物名は不明である。

建物 2 (SB 2、第4・8図)

建物1と重複して存在する、2×2間の建物である。平面形は東西の柱がやや外側に出る形で棟の方向はN-16°-Wである。規模は桁行全長440cm、梁間全長419cm、床面積は約18.4m²、柱穴はすべて円形で柱穴1から炭片、柱穴2から土師質の皿（第8図2）が出土している。2は、薄手で残存状態も良くないため調整は不明である。復元口径14.3cm、器高1.7cmを測り、口縁部は緩やかに外反する。

建物 3 (SB 3、第5・8図)

建物1の北側に位置する1×1間の建物で主軸はN-88°-Eではば東西方向である。規模は桁行350cm、梁間228cm、床面積は約8.0m²、平面形はやや台形状を呈する。柱穴はすべて円形で柱穴1から白磁皿（第8図3）と平らな石、柱穴2から砥石（同4）と平らな石が出土している。3は白磁の小皿で復元口径9.4cm、器高1.9cm、高台部分には抉りがあり破片のため全容は不明だが、3カ所あるものと推測される。なお、内面に重ね焼きの凹跡が残っている。4の砥石は火を受け2つに割れているが完形に復元できる。5面いずれにも使用痕がある。

建物 4 (SB 4、第5・8図)

建物3と重複して存在する、4×2間の建物である。平面形は東隅部分の柱穴1がやや内側にあるためいびつな長方形である。棟方向はN-54°-E、規模は桁行全長967cm、梁間全長520cm、床面積は約50.3m²である。柱穴はすべて円形だがその大きさにはかなりのばらつきがある。柱穴1から土師器と鉄釘（第8図5）が出土し、土師器については細片のため図示していない。5は断面がやや6角形を呈する釘の頭の部分と思われる。

建物 5 (SB 5、第6・8図)

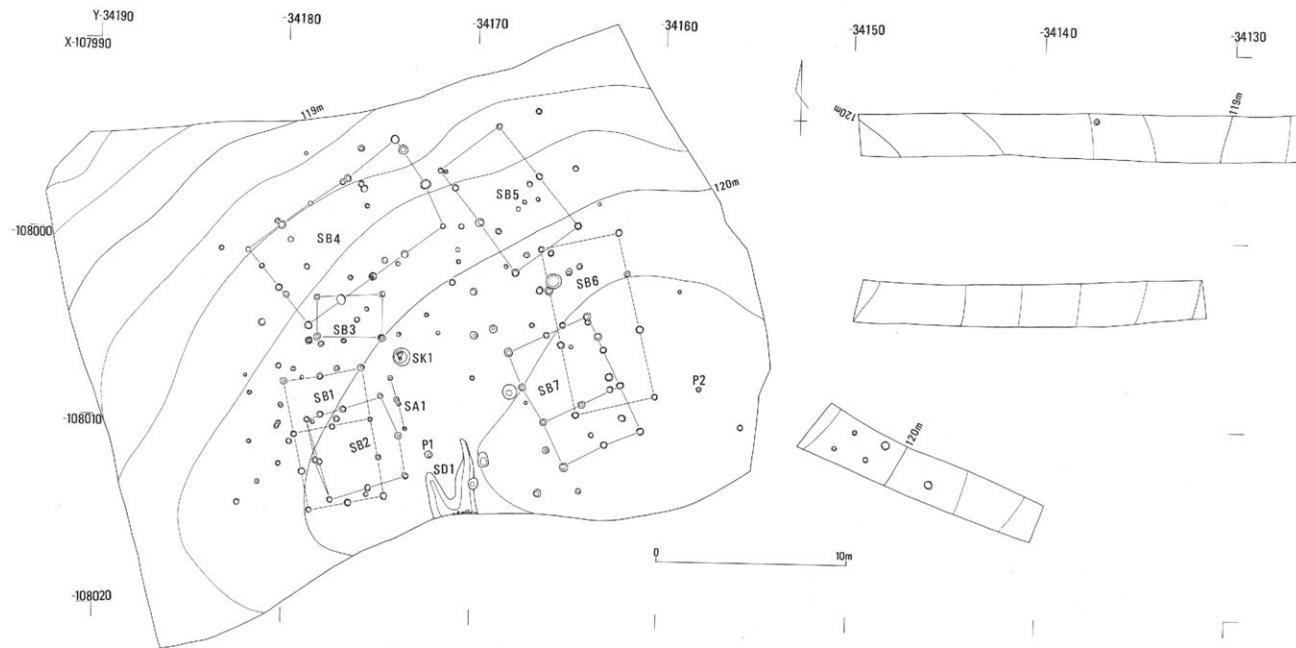
建物4の東側に存在する2×1間の建物である。棟の方向はN-37°-W、規模は桁行全長680cm、梁間全長414cm、床面積は約28.2m²である。柱はすべて円形で柱穴1から須恵器片と瓦質の土器（第8図6）、柱穴2から陶器片（同7）とが出土している。須恵器は細片のため器種は不明、6は、瓦質の壺台の底部と考えられ、外面は弦線で区切られた中に珠文とそのまわりに「螺旋」のスタンプ文、その後段に「@◎」のスタンプ文が巡っている。7は備前焼に良く似たもので、壺の頸部付近の破片で外面には櫛描きの条線文と波状文などが観察される。

建物 6 (SB 6、第6・8図)

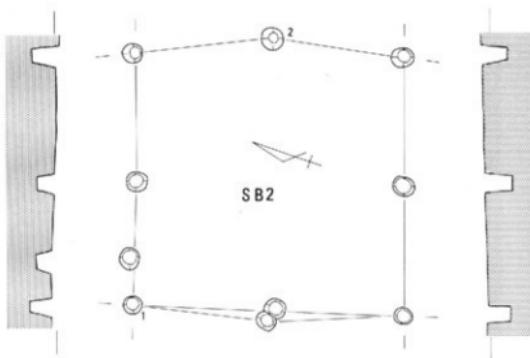
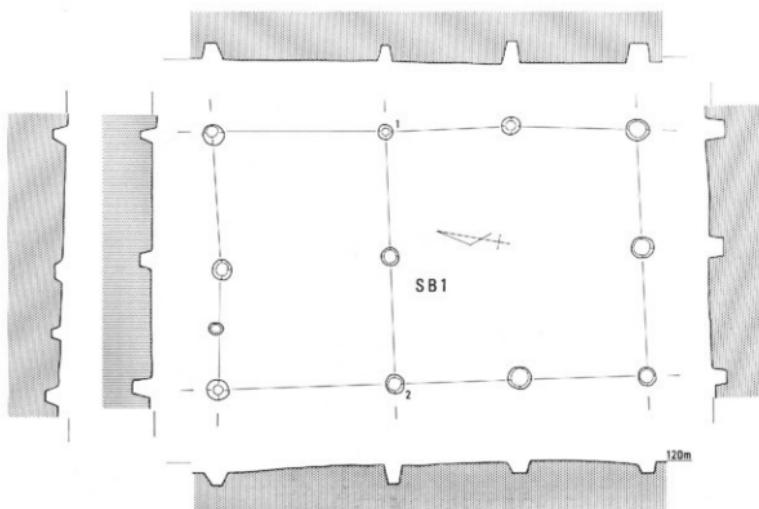
建物5と一部重複して存在する3×1間の建物である。棟の方向はN-13°-W、規模は桁行全長891cm、梁間428cm、面積は約38.1m²である。柱穴はほとんど円形で柱穴1から備前焼片（第8図8）、柱穴2から須恵器（同9）とが出土している。8は備前焼の壺ないしは壺の底部と考えられる。9は須恵器の高杯の脚部であるが端部は不明のため全体像はつかめない。

建物 7 (SB 7、第7・8図)

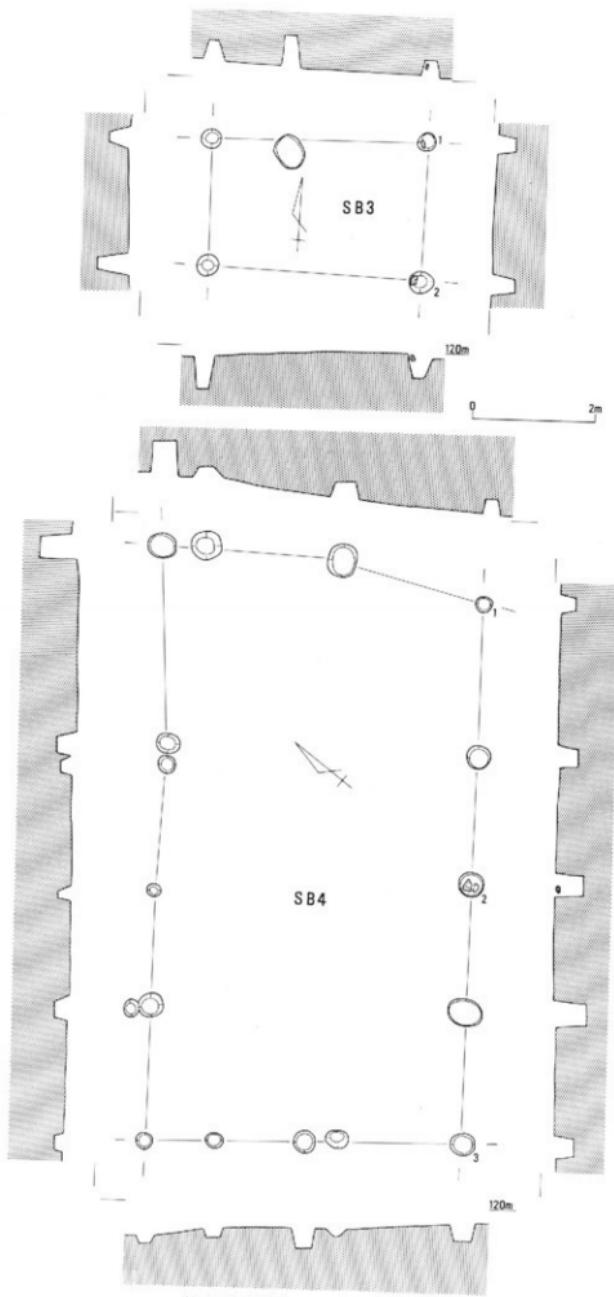
建物6と重複して存在する3×2間の建物である。棟の方向はN-27°-W、平面形は西側の桁行や南側の梁間の柱列がそろっていないため、ややいびつな長方形である。規模は桁行670cm、梁間全長456



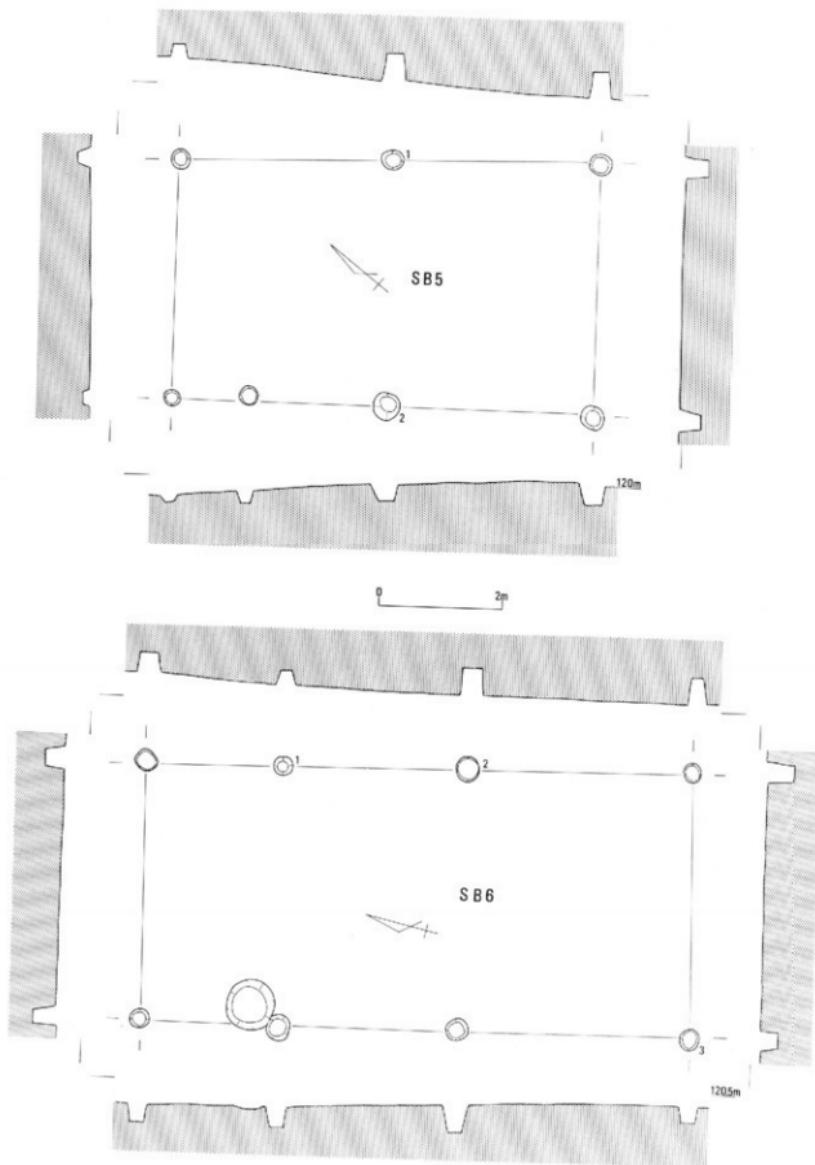
第3図 造構全体図 (S = 1 : 200)



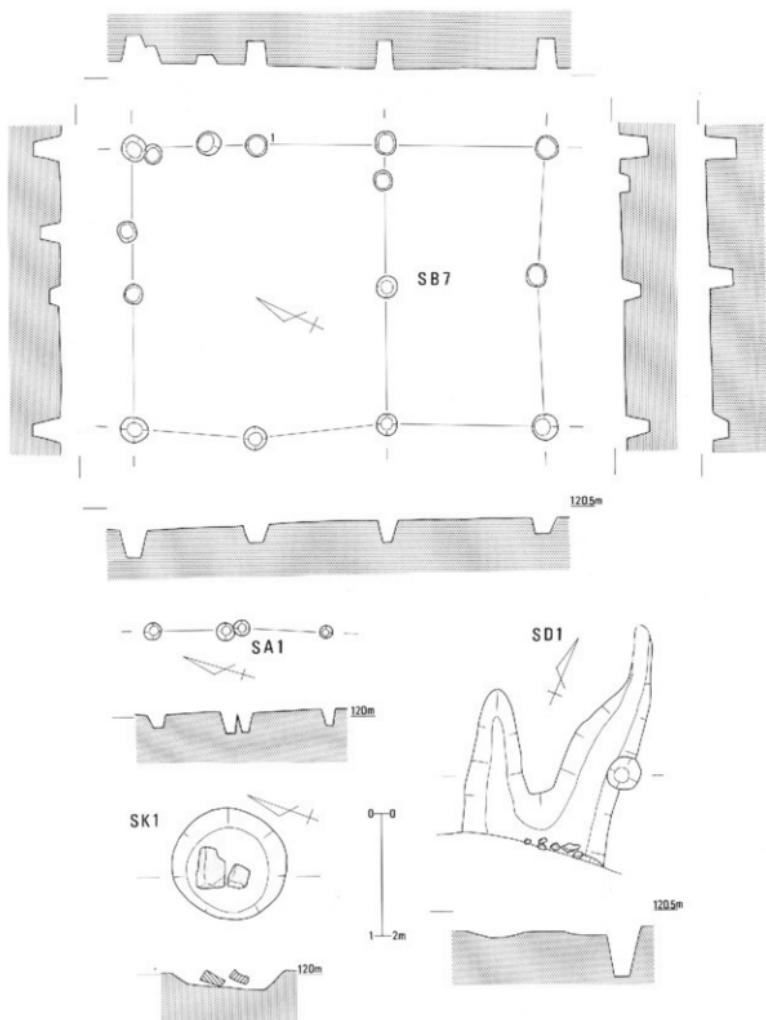
第4図 建物1・2 (S = 1 : 80)



第5図 建物3・4 (S = 1 : 80)



第6図 建物5・6 ($S = 1 : 80$)



第7図 建物7・柵列1・溝1・土壤1 (SK1…S=1:40、その他はS=1:80)
cm、床面積は約30.6m²である。柱穴はほとんど円形で、柱穴1から備前焼片(第8図10)が出土している。10は備前焼擗片の口縁部で端部を上方につまみ上げている。

柵列1 (SA1、第7図)

建物2の東側に平行し一列に並ぶ4つの柱穴を検出した。中央の柱穴は重複するため柱間は2間分である。棟方向はN-16°-Wである。柱穴はいずれも円形で内部からの出土遺物は皆無である。棟方向

は建物2と同じである。

溝1（SD1、第7・8図）

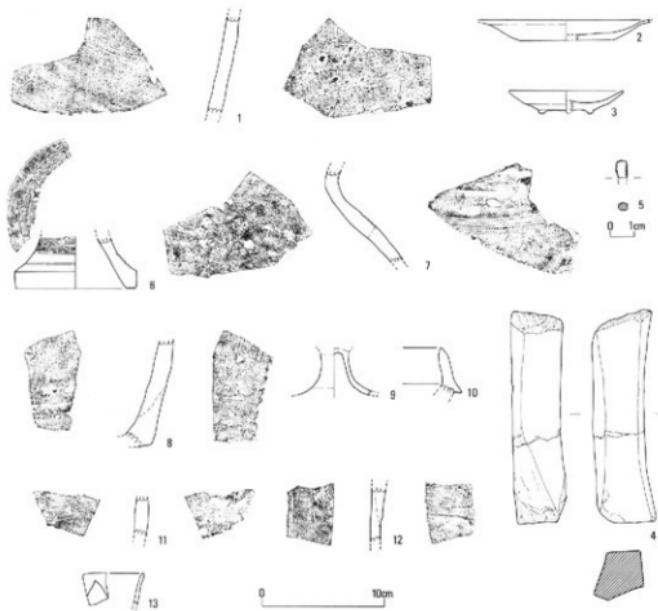
調査区の南側で検出した溝状遺構で、二股になっている。東側の溝は非常に深い柱穴と重複している。南端部分で6個の石が検出され、一部分はさらに1段深くなっている様であるが、調査区外に統くため全容は不明である。出土遺物として陶器片（第8図11）が出土している。11は内面にハケの痕跡が見られるが焼き物名は不明である。

土壌1（SK1、第7図）

調査区のはば中央、建物跡3の南東に位置する円形土壌で、直径0.9m、深さ0.15m、内部から平らな石が2個検出された。最初は井戸の可能性を考えたが非常に浅いため井戸ではなく別の用途が考えられる。出土遺物は皆無である。

その他P1から土器細片、P2から陶器細片（第8図12）が出土している。12は内外面ともハケ目状の条痕が見られるが、焼き物名は不明である。

また、遺構に伴わない遺物として、図示していないが須恵器・甕の細片や青磁碗の細片（同13）が出土している。



第8図 出土遺物（1～4、6～13…S=1:4、5…S=1:2）

5.まとめ

今回の調査で建物7棟、柵列1、溝1などを検出した。その他にも多数の柱穴が存在するため、これらがすべての遺構と言うわけではないが、丘陵頂部の平坦面に営まれた集落構造をある程度推測する事が可能である。しかし、明らかに建物には重複関係があるため、ある程度の時期幅が読み取れる。この時期的な建物配置について出土遺物などから考えてみたい。

(時期について)

出土した遺物は少なく、また細片となっているものがほとんどで、全像を知り得るものは少ない。その中で一番古いものとしては、建物6から出土した須恵器・高杯（第8図9）がある。断片であるため明瞭な時期は不明だが短脚の特徴から、例えば津山市・一宮窯（註1）などに類例が見られ7世紀前半頃、また久米町・鷹山遺跡の編年（註2）では6期にも短脚の高杯が見られる事から、新しく見ても8世紀前半頃までのものと推測される。さらにこの建物の別の柱穴からは備前焼の破片も出土している。そのため、両者にはかなりの時期差が存在し、両者の時期幅が建物の存続期間とは到底考えられないのでは、前者の須恵器は混入されたもので後者が建物の時期を示すものと考えられよう。また、別の建物から出土した備前焼の滑鉢（第8図10）は11縁部の特徴から備前焼編年のIV期（註3）、ほぼ15世紀頃の所産と推測され、建物3から出土した白磁の皿は、その特徴から同じく15世紀頃の年代（註4）が推測される。その他の遺物はいずれも細片のため詳細な時期決定には不十分であるが、7棟すべての建物から少量ではあるがほぼ同時期と推測される陶器類が出土している。さらにこれらに混じって先の高杯と同様、須恵器の破片が数点出土している。これらは分布調査時にも採集されているため、周辺に占據時代の遺構などがかつて存在し、これら建物の建設時などに破壊されその結果混入されたものと解釈したい。よってこれら建物群はいずれも15世紀頃に営まれたものと推測されるが、出土遺物から建物個々の時期細分には至っていないのが現状である。

(建物配置について)

次にこれら出土遺物からは明確に時期幅が読み取れないため、建物の重複関係や棟方向の関係などから時期的な建物配置を考えてみたい。建物は平面形がややいびつなものが建物2・4・7に見られ、規格をみても、1×1、2×1、2×2、3×1、3×2、4×2間と複数あり、同一のものは3×2間の建物1と7だけである。また、梁間の寸法は、390～430cmの範囲におさまるものが建物1・2・5・6と多く、柱間は違うが同一の規格で建てられている可能性も指摘できる。また、建物の重複関係では

建物名	規 格 (間)	規 模 (cm)		床面積 (m ²)	棟方向	出 土 遺 物
		桁 行	梁 間			
建物1	3×2	688～695	404～422	29.3	N12° W	須恵器、陶器、炭
建物2	2×2	435～440	410～419	18.4	N16° W	土師器、炭
建物3	1×1	347～350	210～228	8.0	N88° E	白磁、砥石
建物4	4×2	881～967	515～520	50.3	N54° E	土師器、鉄釘
建物5	2×1	678～680	390～414	28.2	N37° W	須恵器、瓦質土器、陶器
建物6	3×1	888～891	420～428	38.1	N13° W	須恵器、備前焼
建物7	3×2	662～670	455～456	30.6	N27° W	備前焼

第1表 建物一覧表

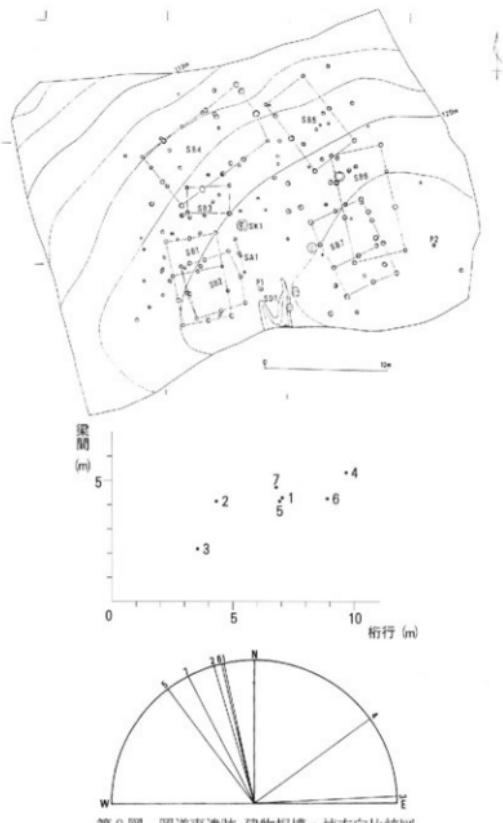
1と2、3と4、5と6、6と7にあり、そのためこれらの同時共存はありえない。次に建物の棟方向（第9図）を見るとN-12°～16°-W（1・2・6）、N-27°～37°-W（5・7）、N-54°-E（4）、N-88°-E（3）の4群に大別できる。この場合4と5とがほぼ直角関係にある。また、床面積で分類すると4と6が38m²～50m²と最大規模、さらに1・5・7が28m²～31m²、2が18m²、3が8m²と大まかに4つに分ける事もできる。以上から、これら建物群に明確な規格性は読み取れないものの、建物の方向性や規格にある程度の共通性が読み取れる。そしてこれら建物の配置は中心に空間をもち、複数配置である程度統一された方向性があり、さらに規模の面では大小のものがそれぞれ配置されることを前提にして、建物配置を想定すれば次のモデルが考えられる。

モデル 建物1・3・6

建物2・4・5・7

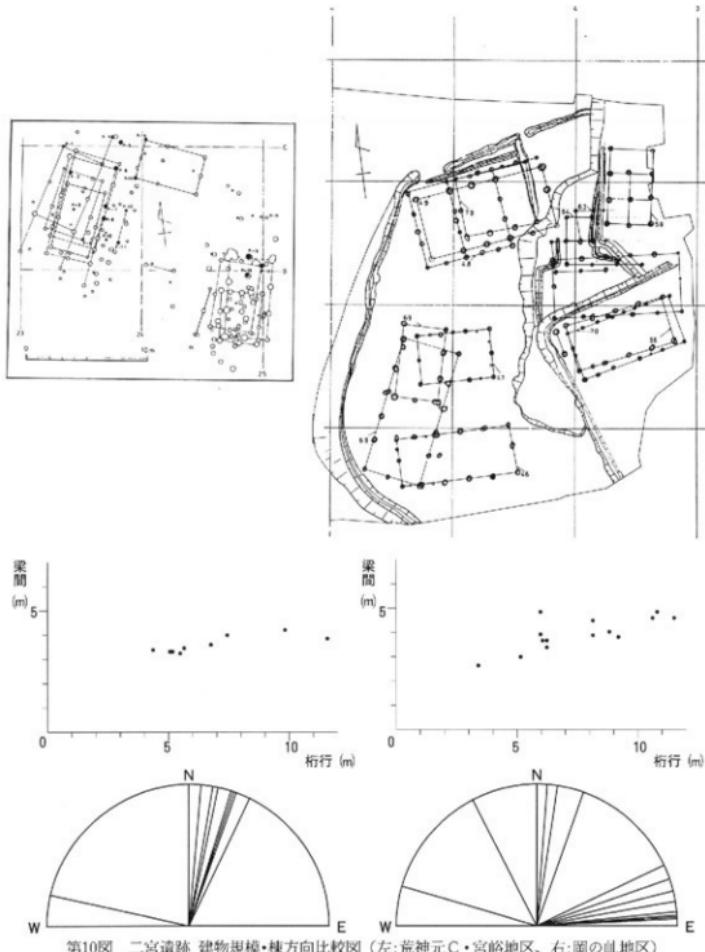
この場合は、4と5は直角関係にあるが近すぎるため、屋根構造を考えると同時併存はあり得ない場合も考えられる。

例えばこれ以外に棟方向や建物の規模を無視したり、さほど複数で構成されていなければ、さらに可能性は増大する。とりあえずここでは上記のモデルをあげ、建物配置については周辺地域の類例などから若干比較検討してみたい。ほぼ同時期と推測される調査例としては、津市山・二宮遺跡（第1図8、註5）、大田茶屋遺跡（註6）などがある。その中で比較的建物配置が知られている前者の二宮遺跡（荒神元C・宮崎、岡の丸地区）と比較してみたい。荒神元C・宮崎地区（第10図左）では、建物9棟が検出されコの字に配置される計画性が指摘されている。時期的に面では平安時代末～鎌倉時代とされ本遺跡より先行するものと考えられる。次に岡の丸地区（第10図右）では溝に区画された建物14棟検出されたが、建物は床面積で分類でき柱間



第9図 岡道東遺跡 建物規模・棟方向比較図

などに一定の規格が読み取れるものの、出土遺物などからの建物配置は明確ではない。さらに建物の性格としては山城が周辺にあるためこれに関連する館跡を想定している。年代は15世紀後半から16世紀前半にかけてである。これと比べた場合明らかに異なるのが区画された溝の存在である。これについては立地条件、さらには建物の性格的な面などがかわっているものと推測され、例えば館跡であるとすれば性格上本遺跡とは同一レベルで比べる事ができないかも知れない。以上三者の建物の規模と棟方向を比較したのが第9・10図のグラフである。まず規模の比較では、本遺跡と同様に岡の丘地区では床面積で4～5種類に分類可能で、桁行の長さに比例して梁間も大きくなる傾向が伺えるが、荒神元・宮畠地



第10図 二宮遺跡 建物規模・棟方向比較図（左：荒神元C・宮畠地区、右：岡の丘地区）

区では、桁行の規模に関係なく梁間がほぼ320～380cmの範囲内に統一されている。この事から荒神元・宮崎地区では建物の規格に梁間を意識した統一性が存在し、また棟方向を見ても1棟の東西棟以外はすべてN-30°～Eまでの南北棟である事から、規格・配置の面にかなりの統一性が看取される。本遺跡と岡の山地区の棟方向も南北と東西を基本とするもののかなりのばらつきが見られる。この事から荒神元・宮崎地区の場合本遺跡に先行するものであり、類例は少ないため断言はできないが、建物の規格面や棟方向との関係には時間的な推移の中で変化も（規格性がさほど重要視されなくなる）見受けられ、これが建物の配置関係にも起因しているものと推測され、また、付随する施設例えば溝などの関係から建物の性格的な面も大きく関連してくる。今回は建物の規模と棟方向のみの検討であるため、建物の配置とそれに関連する性格面などその詳細を言及するまでは至っていない。

次に本遺跡の権列1の性格であるが、非常に小規模であるが主軸関係は建物2とほぼ同じである。となるとこの建物に伴う可能性もあるが、一番南の柱穴が建物の柱穴と近すぎるため、建物2ではなく建物1に伴う可能性もあり、さらに単独で建物に付随するものでなかった可能性もある。また溝1の性格は、建物群が存在しない部分の斜面にあるため、例えばこの集落への南側からの進入路の一部を想定する事もできる。ただ南側は未調査であるため明確な結論には達していない。またこの集落では井戸と考えられる遺構は検出されていない。土壤1がその可能性があったが非常に浅く、これ以外にもややおおきめの円形土壤は検出しているが、いずれも浅く用途については不明である。おそらく眼下には皿川が流れているため、水源の確保はたやすかったものと推測される。

以上、本遺跡はほぼ15世紀頃に營まれた集落遺構で、類例が少ないと建物の詳細な配岡関係については問題点が残るが、ある一時期の集落構造を彷彿させる良好な資料であると言える。

本報告の執筆は1・2を安川、3～5を小郷が担当した。

(註1) 平岡正宏「津山市一宮窯採集の資料について」『乍報津山弥生の里第1号』津山弥生の里文化財センター 1994

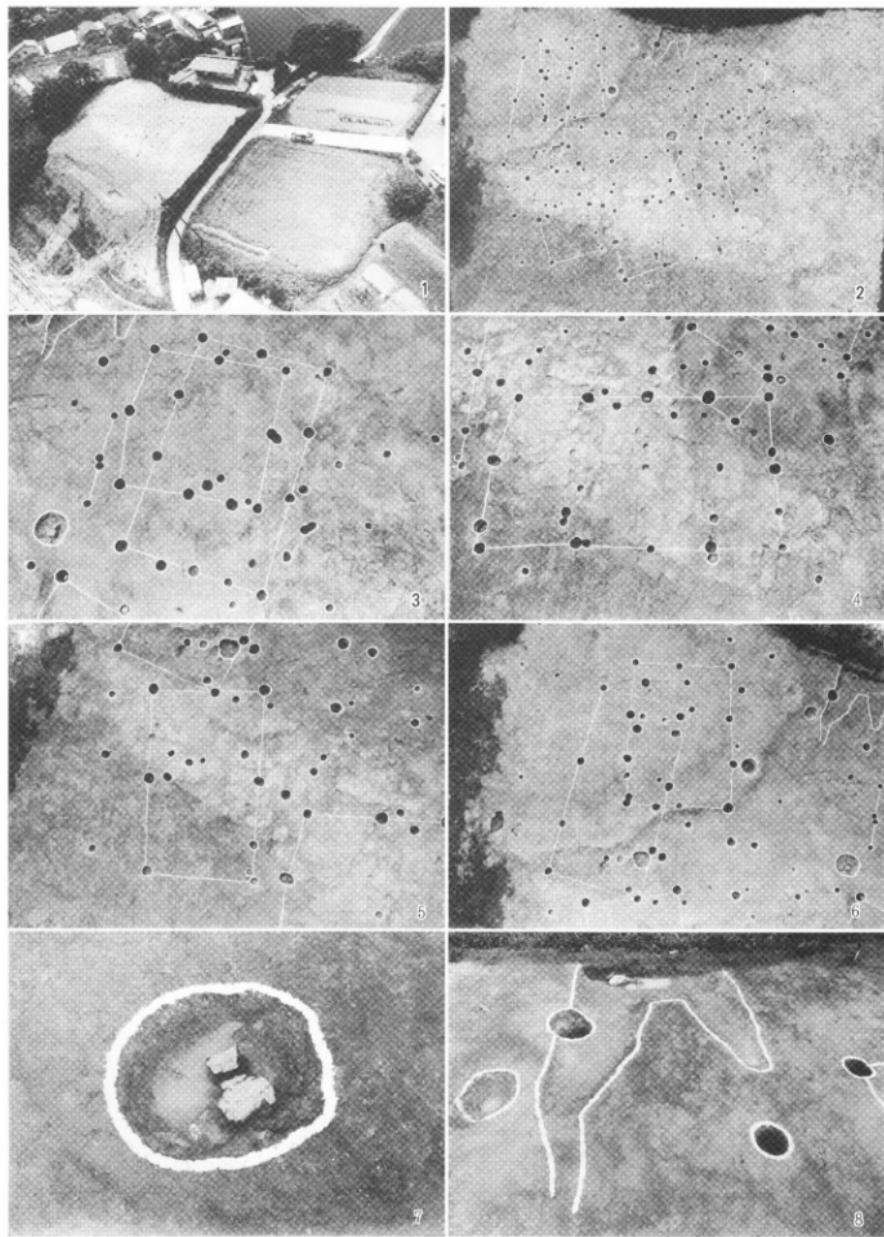
(註2) 村上幸雄『稼山遺跡群II』久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1980

(註3) 間壁忠彦『備前燒』ニュー・サイエンス社 1990

(註4) 斎田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』1982

(註5) 高畠知功・二宮治夫「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』岡山県教育委員会 1978

(註6) 岡本寛久「大田茶屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告96』岡山県教育委員会 1994

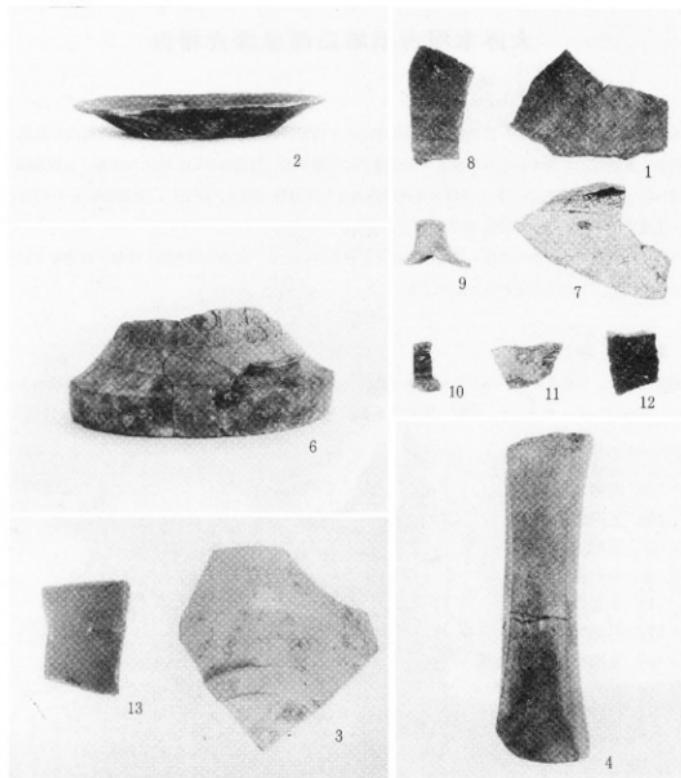


1. 国道東這跡遠景(北西から)
2. 国道東這跡全景
3. 建物 1・2、柵列 1

4. 建物 3・4
5. 建物 5
6. 建物 6・7

7. 土壙 1
8. 溝 1

図版 2



出土遺物

大野木塚古墳墳丘測量調査報告

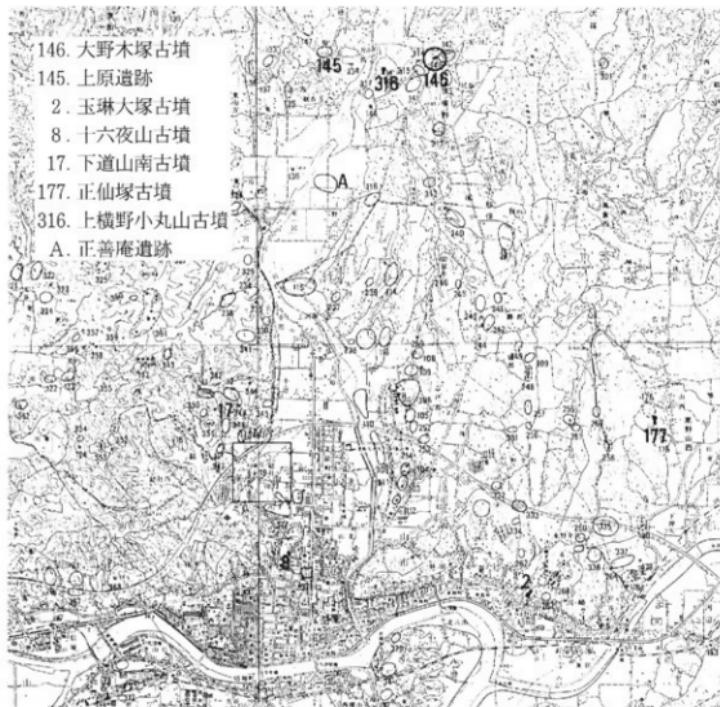
1. はじめに

大野木塚（おおのぎづか）古墳は、岡山県津山市上横野79-2番地に所在する。津山市街地の北部、吉井川の支流横野川の東岸からやや奥まった丘陵上に立地する。周辺には弥生時代の墳墓、上原遺跡（第1図145、註1）、弥生時代から中世の集落遺跡の正善庵遺跡（同A、註2）、全長約46mの前方後円墳・上横野小丸山古墳（同316、註3）などがある。

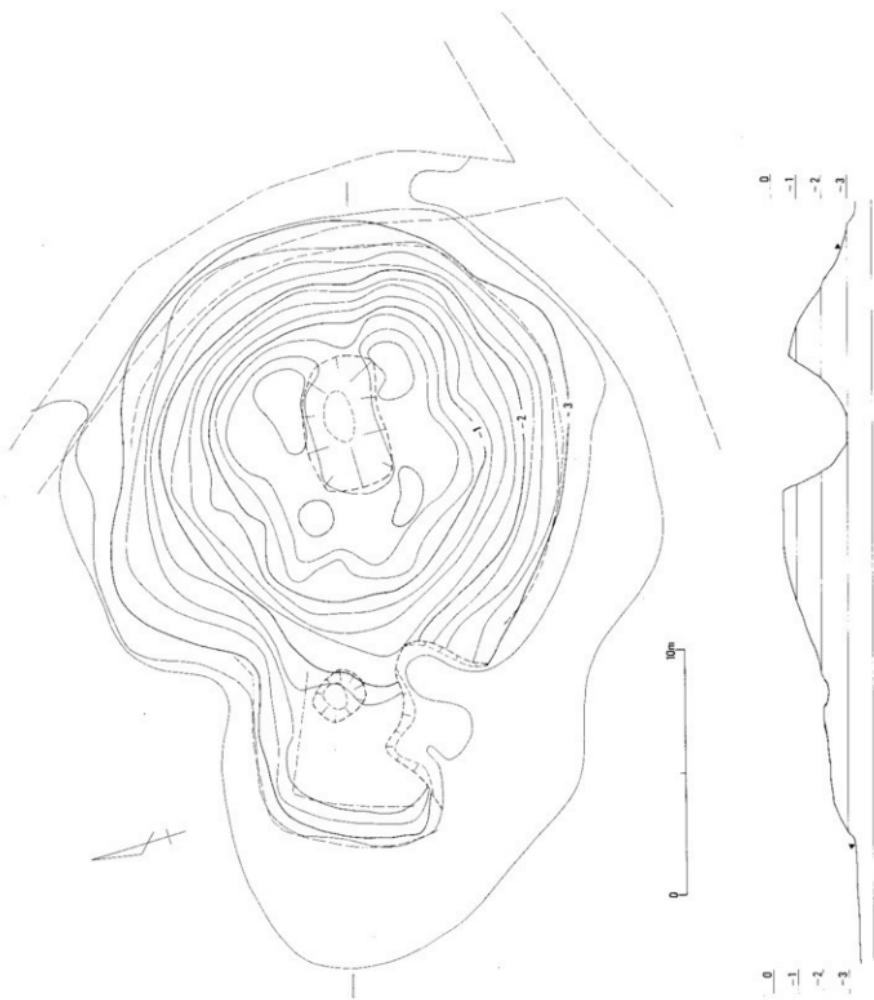
今回の測量調査は古墳の墳形・規模を確認する事を目的とし、以前に須恵器・埴輪・鉄器などが出土しているため、これらも合わせて紹介する。

2. 測量調査（第2図）

測量調査は、平成5年3月25日にセンター職員（行田裕美・小郷利幸）が中心となり、最高所を0として-25cmセンターで行った。方位は磁北である。



第1図 大野木塚古墳位置図 (S = 1 : 50,000)



第2図 大野木塚古墳埴丘測量図 ($S = 1 : 200$)

本墳は以前にかなり大規模な破壊を受け、中心部は大きな穴となりその魔土が周囲、特に北側に掻き出されており、埴頂部周辺はそれの影響をかなり受けている。本墳は円丘の西側に方形の造り出しのつくるわゆる帆立て貝の形をした古墳で、円丘部直徑17.7m、高さ2.75m、方形部長さ7.4m、幅約8m、高さ1m、全長24.5mを測る。円丘部の埴端は流上が著しいため北側は明瞭でない。また、段築も現状

では確認できない。南側のくびれ部もかなり破壊され大きくえぐれている。この部分では互層による盛土の状況が一部で観察でき、石が見られないため葺石の存在は明確でない。この造り出しの形状については墳端が明瞭でないが方形と言えよりも台形に近い形の可能性が考えられる。また、造り出しの上面にも直径2m程の破壊穴が存在する。

埋葬施設に関しては円丘部の中心に長さ5.7m、幅3m、深さ2.5m程のかなり大規模な破壊穴が存在するが、現状では内部に石材が見られない。そのため、石材はすでに抜き取られた可能性もあるが、これだけ大規模に破壊しているにもかかわらず石材が見られない事から石を使用しないもの、例えば木棺直葬などの可能性が大きい。

3. 出土遺物（第3～4図）

出土遺物として今回紹介する資料は、須恵器（1～5）、埴輪（6）、鉄製品（7～14）、耳環（15）である。遺物の出土状況については、馬具の一部が北側のくびれ部付近で出土した以外は不明である。おそらく出土遺物のはほとんどは中心部の破壊に伴うもので、馬具もその廃土から採集された可能性が大きい。

1は須恵器・壺で口縁部と底部が欠損するが胴部はほぼ復元できる。残高42.5cmを測り、胴部外面には平行タタキ、内面には当て具痕が見られる。

2も壺で底部を一部欠損するがほぼ完形に復元できる。口径20cm、器高53.6cmを測り、口縁部は端部を垂直につまみ上げ、端面を平らに仕上げている。頸部外面には2条の沈線が巡っている。胴部外面に平行タタキ、内面に当て具痕が見られる。

3は壺の口縁部の細片である。口縁端部は上につまみ上げ、外面には断面三角形の突帯が1条巡りその下に波状文を施している。1とは胎土が異なり別個体である。

4は杯蓋で、口径14.2cm、器高4.1cm、犬井部との境は明瞭な棱をもたない。口縁端部の内面は、段を残している。外面の天井部半分程に回転ヘラ削りを施し、内面にはタタキの当て具痕がやや広範囲に見られる。

5は杯身で口径12.6cm、器高4.7cm、口縁部はやや内傾して立ち上がり、端部の内面に沈線が1条巡っている。外面の底部3分の1程に回転ヘラ削りを施している。1とセットになるものと考えられる。

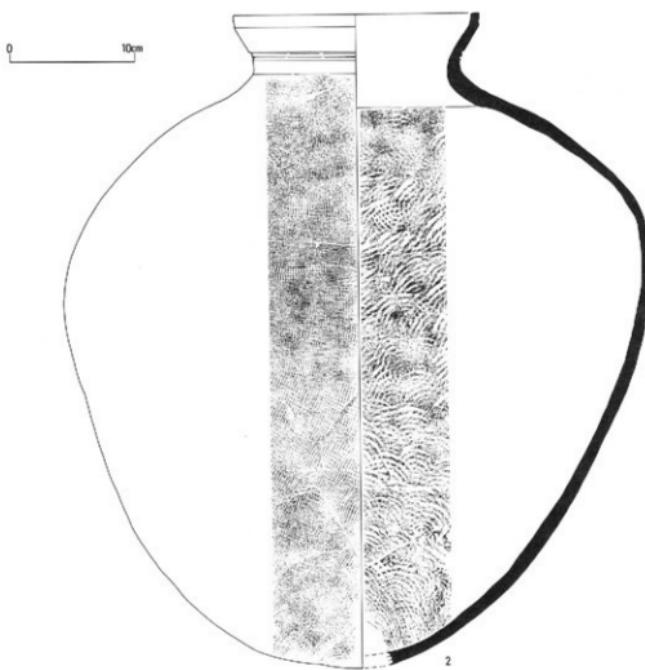
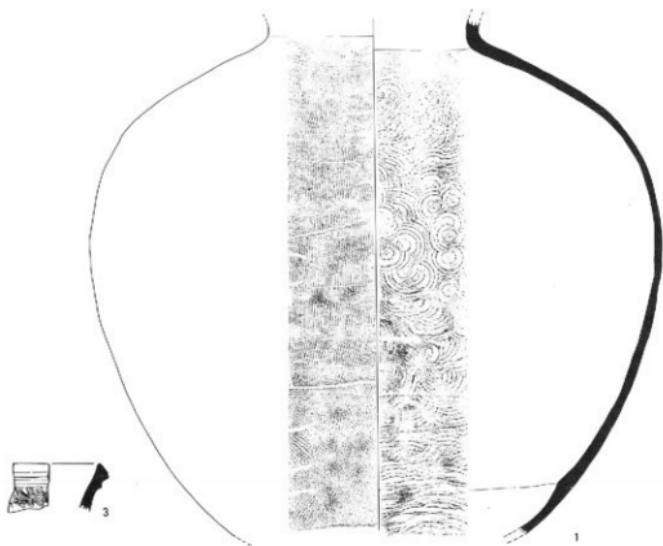
6は円筒埴輪の基部である。破片からの復元であるが底径15.8cm、タガは偏平な台形を呈する。表面は摩滅が著しいため内外面とも調整は不明である。図示した以外にも破片は数点あるがいずれも摩滅が著しく調整は不明である。

7・8は刀子の破片で同一個体と考えられる。刃部幅1.1cm、茎の部分には一部木質が残存している。

9は長頭式の鉄鎌と考えられるが、刃部は欠損するため形態は不明である。

10～14は馬具の壺の一部である。10・11は兵庫鎌で10は12連、11は14連残存し、12～14は鏡板の破片と考えられる。鏡板の周囲を幅1cmで縁どりしその表面を金銅製に仕上げ、鉄製の鉢で留めている。鉢はほぼ当間隔に配されているが、その位置関係がわからないほど鎌の進行が激しい部分が多い。12には金色を呈する部分がかすかに残存するが、その他はほとんど剥がれ落ちている。12～14は同一個体の可能性があるが、接合はしないため全体像は明確でない。

15は銅芯に銀箔を施した耳環である。かなり剥離が著しいため一部分のみ銀箔が残存する。7mm程の管を直径2.8cm程の環状にしている。

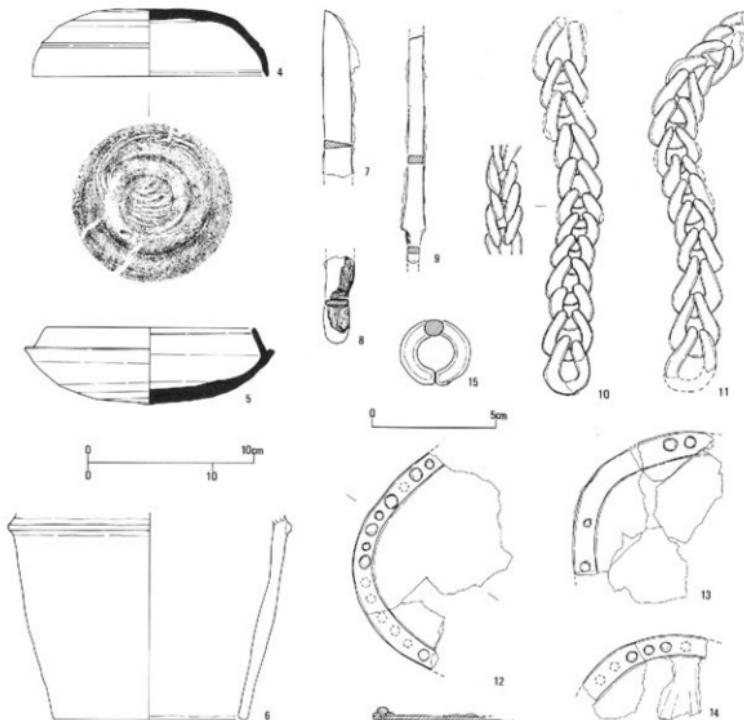


第3図 大野木塚古墳出土遺物(1) (S = 1 : 4)

以上出土遺物の内、1～2、4～14が（故）前原策馬氏所蔵、15は以前に市教育委員会に寄贈されたもの、3は新たに採集したものである。

4.まとめ

大野木塚古墳は、円墳に造り出しの付く全長24.5mのいわゆる帆立て貝の形をした古墳である。まず墳形面で問題となるのは一般的な前方後円墳との違いである。これは、方形部分の長さが円丘部の半径より短い事が前提とされている（註4）。次に造り出し付き円墳との識別が問題となる。この両者は明瞭な差別がなされていないのが現状である。筆者も以前調査した津山市・井口車塚古墳では帆立て貝形古墳としたものの両者の明瞭な差別には触れていない（註5）。そのため両者の差別として円丘部のテラス面と造り出し部分とが同一レベルで一体と解せるものを帆立て貝形とし、それ以外は造り出し付き円墳とする助言（註6）を得、現在はこれに賛同しつつも、例えばテラスが無く円筒埴輪が造り出し部分にも巡っている場合を、テラスの場合と同一にとらえるのか（例えば津山市中宮1号墳、第5図参照）、さらには測量調査だけで決定するには難しさがある。とりあえず発掘調査が行われていない現状では、テラスや埴輪の状況などが明瞭でないため、墳形の計測値を重視しとりあえず広義の意味での帆立て貝



第4図 大野木塚古墳出土遺物(2) (4・5-S=1:3、6-S=1:4、7~14-S=1:2)

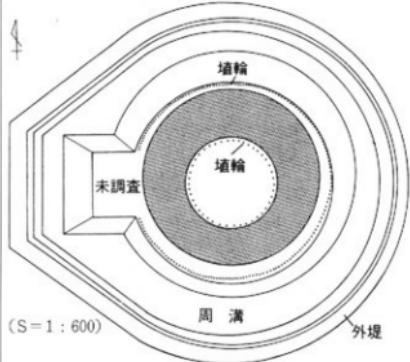
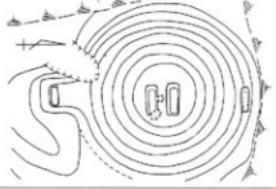
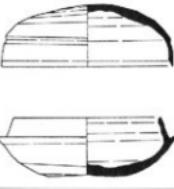
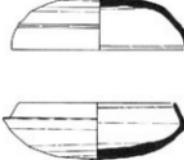
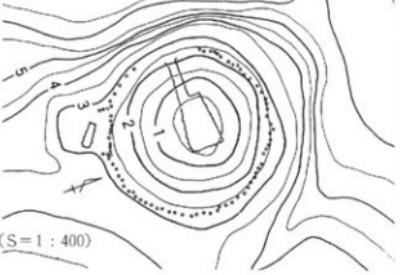
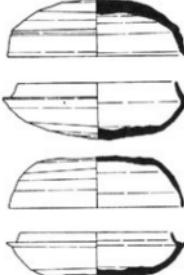
形古墳の範疇で理解しておきたい。

次に時期であるが、出土遺物から検討してみたい。まず須恵器・杯の特徴から大阪陶邑窯の田辺編年のTK10型式（註7）、中村編年のII型式2段階（註8）、美作地方の須恵器編年では美作V期（註9）にはほぼ並行すると考えられ、概ね6世紀中頃の所産と考えられる。また、埴輪については調整は不明のため明瞭でないが、タガの特徴などから川西編年のV期（註10）であろう。馬具については、破片のため全体像は不明であるが、同様な鏡板が津山市・中宮1号墳（註11）から出土している。この古墳は前述した帆立て貝形の古墳で美作地方では最初に導入された横穴式石室をもっている。出土した須恵器から本墳とはほぼ同時期のものである（第5図）。また、銅芯銀張耳環は6世紀中頃以降多く見られるものである（註12）。以上総合的に考えれば、本墳は6世紀中頃に造られたものと考え差し支えなかろう。

次に本墳の位置付けについて若干考えてみたい。本墳は嚴密に言えば古井川の支流横野川の流域に立地し、その中でもやや奥まった丘陵部にある。そのため、周辺の平野部からはかなり離れた立地条件である。おそらく古墳築造をおこなったであろう集団の集落遺跡を周辺に求めれば、正善庵遺跡（第1図A）の存在する東一宮一帯の平野部が候補として考えられる。この遺跡は河川の氾濫源に立地し弥生時代から中世の複合遺跡で、その内中心となるのは5世紀後半と6世紀中頃、そして中世の3時期である（註2）。本墳の築造とはほぼ同時期の集落遺跡が存在するため、これら集落が古墳築造の基盤の1つとなりえた事も推測できるが、あえてやや離れた丘陵部に築造した立地状況については、周辺のその他集落遺跡との関連も含めさらに検討する必要がある。

それでは本流域の首長墳はどのような状況であろうか。前述したように対岸の丘陵には弥生時代後期後半の墳墓（第1図145、上原遺跡、註1、下道山遺跡、註13）が存在し、古備の南部地方との関連が注目される特殊器台形土器が出土している。そのため弥生時代においてはかなりの勢力の存在が推測され、それが古墳造営へと受け継がれていったか否か、次に周辺の古墳の様相を概観してみる事とする。まず最初に造られた首長墳として現時点で考えられているのは上横野小丸山古墳（第1図316、註3）がある。この古墳は推定全長46mの前方後円墳で葺石は存在するが埴輪は無く、破壊が著しいため埋葬施設は不明であり、出土遺物も知られていない。そのため時期に関しては明瞭でないが、葺石の最下段の石が列石風に斜めに立てられている特徴は、美作地方では古手の古墳に見られるものであり（例えば津山市・近長丸山1号墳（円墳20m、註14）、津山市・日上天王山古墳（前方後円墳65m、註15）など）、また前方部の形態は削平のため明瞭でないが、やや開きぎみである点、埴輪や須恵器が使用されていない点、さらには規模を比べると津山市・近長四ツ塚2号墳（註16）や鏡野町・赤畠古墳（註17）とほぼ同規模である点、これらを総合的に考えると先の赤畠古墳とはほぼ同時期と考えられ、古墳編年の2期（註18）の所産と推測できる。その場合弥生時代からの系譜は一端途絶えている感も否めないが、この時期、各支流（例えば香々美川、加茂川）ごとにこれら同一規模の古墳が相次いで造られている事は、当時の社会構造を考えるにあたっては注目に値する。

その後の系譜としていわゆる5世紀代の前方後円墳をもつ首長墳は見られず、この現象は古備地方ではある程度普遍的なものと解されている。そしてこの5世紀は各地で方墳が相次いで築造され、本流域では下道山南古墳（第1図17、註12）がそれである。この古墳は一辺15mの方墳で埋葬施設は箱式石棺2基があり、円筒埴輪や形象埴輪が出土している。その後、7～8期頃に十六夜山古墳（第1図8）が造られる。この古墳は、最近の確認調査で2重に周溝を巡らす全長60m程の前方後円墳と考えられ葺石、埴輪の使用が確認された（註19）。この古墳は同時期で比べると美作地方では最大規模を誇り周溝が整っ

墳丘測量図・復元図		須恵器
井口車塚古墳	 <p>(S = 1 : 600)</p>	<p>埴輪 埴輪 未調査 周溝 外堤</p> <p>円筒（ヨコハケ）・形象（桶・家・人物） 有</p>
六ツ塚1号墳	 <p>(S = 1 : 400)</p>	 <p>円筒（タテハケ）・形象 無</p>
大野木塚古墳	 <p>(S = 1 : 400)</p>	 <p>円筒 ？</p>
中宮1号墳	 <p>(S = 1 : 400)</p>	 <p>円筒（タテハケ） 無</p>

第5図 執立て貝形古墳変遷図

たものである。そしてその次に造られるのが今回報告した大野木塚古墳である。本墳は墳形も帆立て貝形古墳で規模も30m以下、埋葬施設については不明だが、おそらく美作地方ではまだ横穴式石室は一般化しておらず、本地域では導入されていないものと考えられる。この後いわゆる横穴式石室が導入、一般化され、群集墳が多数造られていく。

次に美作地方、特に吉井川周辺の帆立て貝形古墳について若干触れてみたい。第5図に変遷図がある。出土遺物などから井口車塚古墳→六ツ塚1号墳（註20）→大野木塚古墳・中宮1号墳へのおおまかな変遷を考えられる。井口車塚古墳が全長35.5m（外堤を含めると48.5m）、テラスをもち周溝とそれを取り廻む外堤など整った墳形であるのに対し、六ツ塚1号墳以降はテラスや周溝を伴わず形態的には非常に簡略化したものとなり、規模も20m前後に縮小される。埴輪の使用は認められるが、六ツ塚1号墳の段階以降は葺石も使用されなくなる。また、井口車塚古墳については方形部に埋葬施設が存在するか否かは不明だが、六ツ塚1号墳・中宮1号墳には存在する。そのため人野木塚古墳にも存在する可能性は大きく、この方形部が埋葬施設として機能している状況が伺える。ただ井口車塚古墳については、この方形部周辺から形象埴輪が多數発見されている事から、埋葬施設と言ふより祭壇的な意味合いが強かったのではないかろうか。そして、中宮1号墳の時期に、美作地方で最初に横穴式石室が採用される。そしてその事は、この六ツ塚1号墳以降の社会状況の中に、横穴式石室を受け入れるべく始動していた当時の社会情勢があり、それが外圧的なものか、その場合どのようなものであったか、それを理解するためには、この時代の社会状況を集落・古墳といった多角的分野から細かく比較分析・検討する事が必要となる。この時代の集落遺跡についてはまだまだ資料不足であり、この時期以降等質的な小規模古墳が増大し須恵器など副葬品が多量化する背景には、これら地域を越えた全国的レベルでの枠組みが存在するものと考えられる。

私はこの横穴式石室導入時期及びその後の背景について以前に見解を述べた事がある（註9）が、この導入にはかなり地域差が見られ、導入に至る過程についてはまだまだ不明瞭な部分が多く一概に論せない部分が多い。例えば美作地方の畠川流域を例にとれば中宮1号墳になぜ最初の横穴式石室が導入されたか（それ以前の首長墳の系譜がおえない地域）など、今後整理せねばならない研究課題も数多くある。さらに本墳のある横野川流域で最初に横穴式石室を導入した古墳についても知られておらず、現段階では本墳はまさにこの導入の段階の首長墳の様相を色濃く残していると同時に、当時の社会状況を示唆している重要な歴物と考えられる。

尚、出土遺物の尖端、写真撮影などには物生の里文化財センター野上恭子、岩本えり子、家元博子各氏の協力を得、また出土遺物のほとんどを所有されている（故）前原策馬氏、現在保管している津山郷土博物館湊哲夫氏には資料紹介の便宜を図っていただいた。記して厚く御礼申し上げます。（小郷利幸）

（註1）近藤義郎「上原遺跡」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986年

（註2）小郷利幸「正善庵遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第44集』津山市教育委員会1992年

（註3）平岡正宏「上横野小丸山古墳発掘調査報告」「年報津山弥生の里第1号」津山弥生の里文化財センター1994年

（註4）石部正志他「帆立貝形古墳の築造企画」「考古学研究第27巻第2号」考古学研究会1980年

（註5）小郷利幸「井口車塚古墳」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第52集』津山市教育委員会1994年

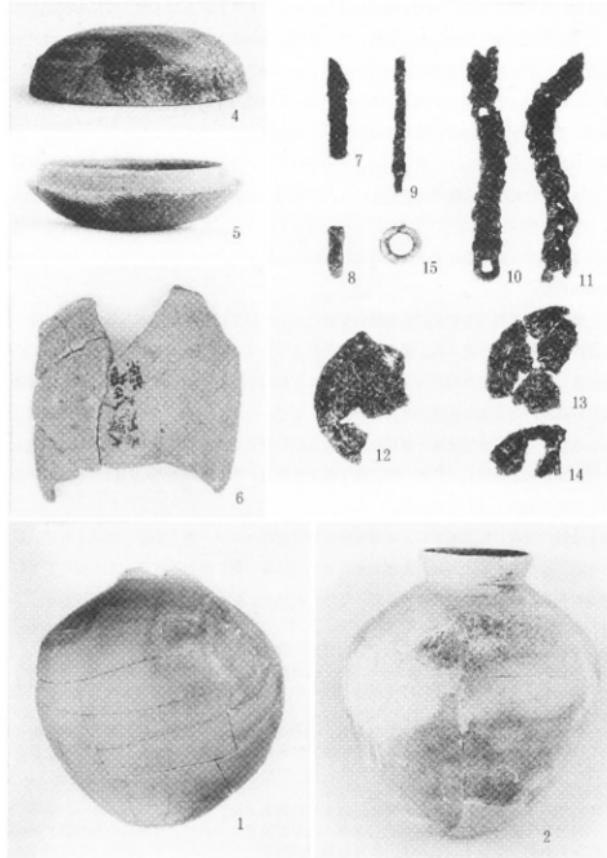
（註6）大谷児二氏に御教示を得た。

（註7）田辺昭三「須恵器大成」角川書店1981年

（註8）中村浩他「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書第30輯』大阪文化財センター1980年

（註9）小郷利幸「美作における横穴式石室導入前の群集墳について」「門の山古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集津山市教育委員会1992年

- (註10) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌第64巻第2号』日本考古学会1978年
 (註11) 近藤義郎他「佐良山古墳群の研究第1冊』津山市1952年
 (註12) 松本百合子「耳飾」「古墳時代の研究8 古墳II副葬品』雄山閣1991年
 (註13) 栗野克巳他「下道山遺跡緊急発掘調査報告』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告17』岡山県教育委員会1977年
 (註14) 小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会1992年
 (註15) 日上天王古墳発掘調査団「日上天王古墳発掘調査概要」『年報津山弥生の里第2号』津山弥生の里文化財センター1994年
 (註16) 小郷利幸「近長四ツ塚古墳群墳丘測量調査報告」『年報津山弥生の里第2号』津山弥生の里文化財センター1994年
 (註17) 近藤義郎「赤崎古墳」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986年
 (註18) 近藤義郎編「前方後円墳集成中國・四国編』山川出版社1991年
 (註19) 尾上元規「十六夜山古墳関連遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告25』岡山県教育委員会1995年
 (註20) 沢本清「六ツ塚古墳群」『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会1986年、六ツ塚1号墳の測量図は略測図である。



出土遺物

正仙塚古墳測量調査報告

1. はじめに

正仙塚古墳は、加茂川に沿って開けた沖積平野を東に見おろす丘陵頂部に位置する前方後円墳で、津山市高野山西正仙塚1866番地他に所在する。

本墳は、古く明治年間に盜掘にあり出土遺物の概要が明らかで、後円部に石棺が露出している。津山市内に存在する重要な前方後円墳のひとつとして昭和40年に津山市指定文化財となつたほか、昭和50年には墳丘測量を実施している。この時は、樹木の充分な伐採が行えず、測量範囲は墳丘部分に限定せざるを得なかった。特に墳丘西側は樹木の繁茂が著しく、測量範囲がやや不十分で周辺地形との関係を作図することができなかつた。このため、今回の整備作業に伴い墳丘の再測量調査を実施することとした。

2. 調査経過

測量は国土座標にもとづくトロバース測量の方法をとり、平成7年3月17日から30日まで実施した。墳丘主軸に沿った10m間隔の測量基準点を設置し、平板測量を行つた。等高線間隔は25cmで、海拔絶対高を用いた。墳丘部分はほぼ完全に樹木の伐採が行われていたので、作業はおむね順調に実施することができ、墳丘の周辺部も含めた実測図を作成し、当初の目的を達することができた。

(安川豊史)

3. 觀察所見

古墳は尾根の頂部に位置し、東側はなだらかな斜面、西側および南側は急斜面となつてゐる。墳丘は、後円部、前方部とも主に西面において大きく改変を受けている。後円部墳頂から北西側へかなりの盛土が流出している。また、墳頂平坦面南側は前方部側に大きく削られている。前方部西側についてもほと



図1 加茂川流域の前半期前方後円墳（縮尺1:50,000）

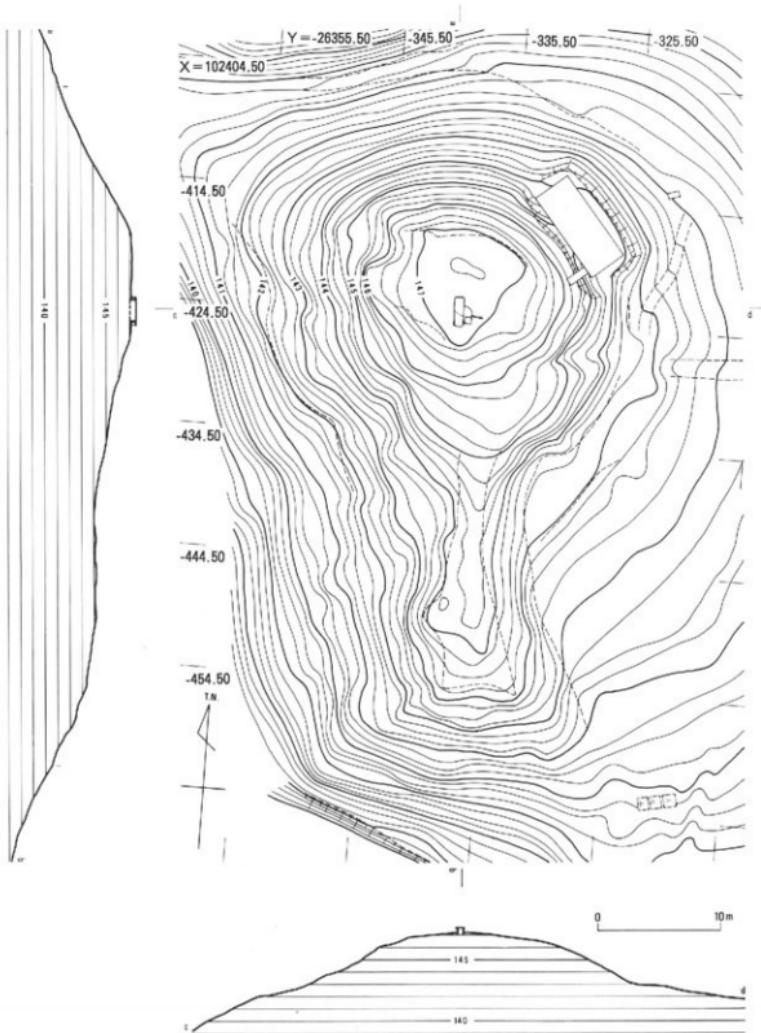


図2 正仙塚古墳埴丘測量図(縮尺1:400)

んど全面にわたって盛土が流出し、後円部南側からの流出とみられる上砂も重なって墳形が大きく乱れている。これに対し、後円部北側前面、南東側墳裾付近および前方部東面は旧状を比較的良く残しているものと考えられる。後円部の墳端想定線は南東側よりも北側が約2.5m低くなっていて、立地上の制約を受けているようである。段築については現状では確認できない。

(坂本心平)

4. 墳丘の復元

一般に、測量調査の成果だけから墳丘建築規格を復元するのは困難である。本墳の場合も西半部は墳丘の流出が激しく、こうした検討は今後の発掘調査にまつところが多い。ここでは、現状で認められる所見の範囲内で墳丘の復元を試みることとする。したがって、以下の議論は、ある程度の蓋然性をもって現時点で考えられるひとつの試案であることを断わっておきたい。

後円部墳端を示すと思われる傾斜変換線はあまり明瞭でない。後円部北端に認められる傾斜変換線は山墳を迂回する道によって形成されたもので、墳端の外に位置すると考えられるので、これより内側の141.25mから141.50mにかけての位置に墳端点Aをとる。後円部北東斜面に構造された簡易水道施設の南東端付近（B点）から東側くびれ部（C点）にかけて墳端を想定し、これらの3点を用いて正円に復元した場合、後円部直径は32.5mとなる。

後円部墳頂平坦面の規模については、北半部の傾斜変換線が比較的旧状をとどめていると判断される。この147mラインの変換線から導かれる平坦面の直径は約13mであるが、最初にのべたように現在の墳頂部には石棺の露出が認められる。石棺の最高部は現墳頂面から0.4mに達するので削平を考慮にいれた場合、墳頂平坦面の直径はこれよりもひとまわり小さく復元される。その場合、石棺は墳頂平坦面のほぼ中央部ないしはやや南寄りに位置することとなり、後円頂部からくびれ部にかけてみられるゆるやかな不整形平坦面が、後円部を削平した際の土砂の堆積によって形成されたことが理解できる。また、墳長平坦面の位置は後円部基底面の中央部ではなく、それよりやや南にずれて位置することになる。

墳丘の東外方に広がる平坦面は、現在植林がなされているが、基本的には旧状をとどめているものとみてよい。したがって、前方部東側の填埋にみられる傾斜変換線はほぼ墳壁にあたると考えられる。この変換線はくびれ部から2分の1程度までは墳丘主軸に平行し、途中で外方に開いた特徴的な形態を示している。前方部全面の等高線走行は墳丘主軸に対しやや斜行するが、前方部の南東隅は140.25m地点にあたると考えられる。

測量図と現地の観察から解析した墳丘の復元データを整理すれば次のような。墳長55.5m、後円径約31m、同高約6m、前方長約24.5m、同前面幅約23m、同高約3.5m、くびれ幅約12m、後円部と前方部の高低差推定3.75m。

5. まとめ

正仙塚古墳の墳丘にみられる最大の特徴は、途中からバチ形に聞く前方部の形状にある。現状で確認できる、同様の特徴をもった美作地方の前方後円（方）墳には、勝田郡勝央町美野中塚古墳（前方後円墳、52.5m）、津山市日上天王山古墳（前方後円墳、約55m）、若田郡鏡野町郷観音山古墳（前方後円墳、約43m）、久米郡中央町源訪神社裏古墳（前方後円墳、約51.4m）、真庭郡落合町川東車塚古墳（前方後円墳、約61m）がある。このうち正仙塚古墳と墳長がほぼ一致するのが日上天王山古墳である。

日上天王山古墳については、発掘調査が近年実施され、墳丘についての検討を含めた発掘調査報告書が準備中なので、詳細についてはそれにゆずりたいが、内部主体や出土遺物からも古墳時代前Ⅰ期に属すると考えられている。過去の測量成果によれば、日上天王山古墳の墳長は約55m、後円径約31m、同高約4.9m、前方長約26m、同幅約24m、くびれ幅約12mのデータが得られている。これらの数値はいずれも正仙塚古墳の寸法と類似しており、両者の実測図を重ね合わせて検討したところ、平面形はほぼ一致することが判明した（図3）。つまり、両墳は大きさ、前方部の形態、墳丘平面各部の比率とい

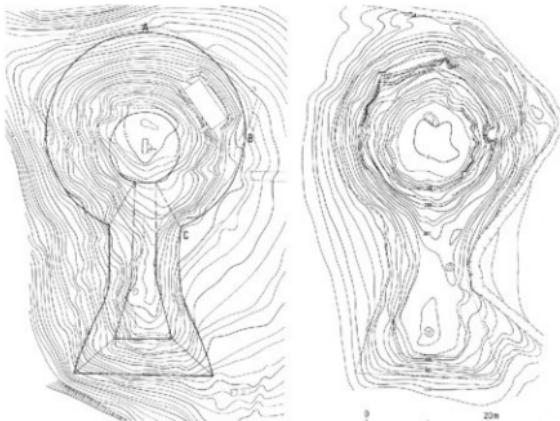


図3 墳丘復元図と日上天王山古墳(右)

3要素とも酷似しているということになり、これは単なる偶然の一致とみるよりも墳丘の築造に際し共通の地割り規格がもたらされた結果と考えるべきであろう。なお、両墳とともに後円部墳端線と後円頂部平坦面において、いわゆる「0点の移動」が認められる。特に正仙塚古墳では特に顕著だが、これは北条芳隆氏が指摘したように（北条1986）、かなりの高低差をもつ狭い丘陵地形上に対して地割り規格を厳密に適用しようとしたことの反映であると理解される。正仙塚の築造時期について墳丘形態からみれば、日上天王山古墳に近接した年代が予想されるが、これは從来の年代観（註1）に変更をせまることとなる。つぎに、内部主体と出土遺物の面から所属時期を検討する。

正仙塚古墳の組み合せ石棺は、その構造等から長持形石棺あるいはそれに類するものとみられてきた。これまでにも指摘されてきた（註2）ように本例は襤掛突起をもたないという点において典型的な長持形石棺とは区別して考えられるが、石材の組み方は長持形石棺に共通する。また、間壁忠彦・間壁蘿子両氏の研究によって、一般的な長持形石棺と同様に竜山石をもちいていることが明らかとなっている（註3）ので、長持形石棺の範疇に入るかどうかは別にしても、すくなくとも長持形石棺の系統に近いものであったことは確かであろう。長持形石棺の先行形態については前II期の年代が与えられているので、ここでもそれに近いものと理解しておきたい。

いっぽう、副葬品としては、鉄刀2、鉄劍1、銅鏡2面などの出土が伝えられている（註4）。現在それらの所在は不明で、直接観察することは不可能だが、1面の変形四獸鏡は後藤守一氏によって拓影が紹介されているし、もう1面の半円方形帶鏡については梅原未治氏によって観察所見が記録されている。それによれば、半円方形帶鏡は外区の4分の1を残すにすぎない破鏡で、両面ともに著しく磨滅し両端部に尖孔がみられるという。鉛黒色を呈する銅質等から舶載鏡と考えられているので、これらをこそさら新しく位置づける必要はないだろう。

日上天王山古墳の時期を4世紀前半とした場合、正仙塚古墳は4世紀中葉から後半に位置づけることができよう。したがって、墳丘の築造にあたっては先行する日上天王山古墳築造に用いられた地割り規格（註5）が、正仙塚古墳に引き継がれたことを示している。正仙塚古墳と日上天王山古墳とは直線距

離にして3.4km離れている。間には加茂川と丘陵が存在し、地形的に必ずしも单一地域を形成するとはいきれないが、墳丘に以上のような類似性が認められることは両者が同一首長系列で結ばれていた可能性を示すものと考えられる。

(安川豊史)

- 註1 従来「長持形石棺」の存在から5世紀代に位置づけられることが多かった。
- 2 たとえば間壁忠彦・間壁葭子1975、倉林眞砂斗1992に指摘がある。
- 3 間壁忠彦・間壁葭子1975による。
- 4 光井清三郎1903、梅原末治1952、後藤守一1926、湊哲夫1986による。なお、光井1903によれば棺内には2体の人骨が遺存し、北頭位の人骨は「赤色素焼」の焼物の枕を用いていたという。この種の枕としては鼓形器台か壺などの口縁部が考えられるが、この場合は前者の可能性が高いと思われる。同様の例として最近の発掘では津山市有本古墳群で前期の方墳2基から出土した例がある。
- 5 ちなみに墳長55mという数字は、奈良県箸墓古墳のちょうど5分の1に相当する。このことについては澤田秀実氏の指摘を得た。

参考文献

- 光井清三郎「美作考古界（三）」『考古界』第2篇第8号, pp. 29-33, 1903年
- 梅原末治「岡山県下の古墳発見の古鏡」『吉備考古』第85号, pp. 1-13, 1952年
- 後藤守一『漢式鏡』, pp. 652-653, 1926年
- 間壁忠彦・間壁葭子「長持形石棺」『倉敷考古館研究集報』第11号, pp. 1-41, 1975年
- 湊哲夫「正仙塚古墳」『岡山県史』考古資料, pp. 294-295, 1986年
- 北条芳隆「墳丘に表示された前方後円墳の定式とその評価」『考古学研究』第32巻第4号, pp. 10-30, 1986年
- 倉林眞砂斗「石棺」『古備の考古学的研究』下, pp. 677-686, 1992年

2. 資料紹介・研究ノート



美和山1号墳

津山の弥生土器 1 (壺形土器)

中山 俊紀

中期の壺形土器

美作の中期に属する壺形土器の基本的な種類は多くはない。長頸の壺が、頸部以上の形態的特徴により大きく3種に分かれる他、広口の壺1種、短頸の壺2種の合計5種類で基本的因素が構成されている。

長頸の壺3種は、基本的形態ともいべき口縁端部を単純に拡張するもの（図1-1～3）、準基本的形態ともいるべき口縁端部を水平方向に拡張し上端面に凸帯あるいは凹線を巡らすもの（図1-4～7）、口縁端部を垂下させるもの（図1-8～9）とに区分可能で、それぞれA、B、Cと仮に呼ぶ。いづれも頸部に凸帶ないしは凹線文を基本的には巡らし、胴部上半を平行の櫛描文と波状櫛描文で交互に飾り、胴部下半を磨きで仕上げる特徴は、基本的に共通する。時期的変化においても、凸帶文から凹線文へ、また凹線文の多条化・細線化・沈線化へ、あるいは胴中央部のよこ磨きの省略化、円形浮文の浮沈など、3種ともども連続変化しており、中期末には一部装飾要素の欠落および模様の特化もみられるが、総じて個別種ごとの変異に乏しい。

3種の相違は、主として口縁部の形態の違いに基くものであり、その相違は、Bにしばしば木蓋を固定するためとみられる縫孔が隨伴するなど、機能差に解消できるものと理解できる。この見方が正しければ、A、B、C3種の長頸の壺は一連の極めて保守的な伝統のもとで作り続けられたもので、形態の相違は、機能に基づく差にすぎないということになる。

広口の壺も、基本形態は口縁部に連続圧痕あるいは連續さみ目のつく複数の凸帯を巡らすもの（図1-10～12）1種である。貼付凸帶の凹線化を基本的流れとして変化するが、中期後葉前半に櫛描文で突然華やかに飾られたものが出現したのち、みかけられなくなる。

短頸の壺も基本的な形態（図1-13～15）は1種で、他に胴部が算盤玉のように屈曲する特徴をもつもの（図1-16～17）が少数ある。それぞれ板にA、Bと呼ぶ。Bは、肩部分を原則として斜格子文で飾るが、斜格子文は当初細縄を束ねたような工具で描かれたものから、櫛描で鋭く引きざされたものへと変化する。中期末には、斜格子文が櫛描波状文他にとってかわられる個体が出現するが、胴部が鋭く屈曲する特異な器形自体は、後期に落ちこされる。

これら壺のうち広口の壺がもっとも早く消滅し、中期末に長頸の壺B、Cが消滅するが、長頸の壺A、短頸の壺A、Bは後期に連続していく。

津山地域のみならず、美作全域をながめまわしても、壺形土器の構成に相違はみられない。

後期の壺形土器

後期の壺形土器には、中期から継続した種類のものとして長頸の壺A（図2-18～19）、短頸の壺A（図2-32～37）、短頸の壺B（図2-38）がある。しかし、それらは後期を通じ一貫して難起的に存続するものではなく、系譜的にもっとも持続性をもったとみられる短頸の壺Aですら、後期中葉に衰退してしまう。

それらと並存して、後期初頭から岡山南部の上東式系譜に含まれるとみられる長頸の壺（ラインD）や短頸の壺が出現する。当初それらは、搬入品ともみられるほどの類似性をもち、以降後期後葉までさまざまな変容を繰り返しつつ存続する。また束縛ないしは畿内の土器の影響を強く受けたとみられる上器（ラインE）も後期初頭に出現し、この土器伝統は後期後葉にタキ或形の上器として明確に認識で

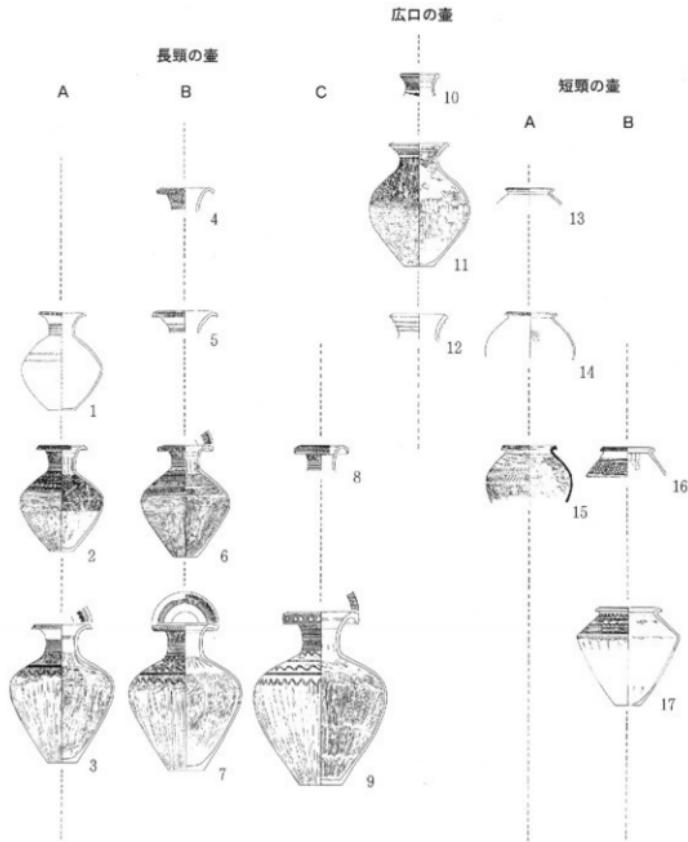


図1の上半は、中期中葉を、下半は中期後葉に位置づけられる。横の並びで示される土器相互の関係は、おむね土器編年上の区分に一致している。

土器出土遺跡

高木遺跡（1、5、12、14）、沼E遺跡（4、11、13、23、27）、高橋谷遺跡（10）、金井別所遺跡（2、6、8）、京免遺跡（15、18、19、21、24、35、36、37、38、39、40、55）、野田遺跡（16）、ビシャコ谷遺跡（3、7、9、17）、大田十二社遺跡（20、22、26、28、39、41、44、45、46、49、51、52、54）、竹田遺跡（43、53）、一貫東遺跡（29、31、32、34、50）、釋山遺跡（30）、二宮遺跡（47、48）、椎現山遺跡（42）

図1 中期の弥生土器（壺） 縮尺約16分の1

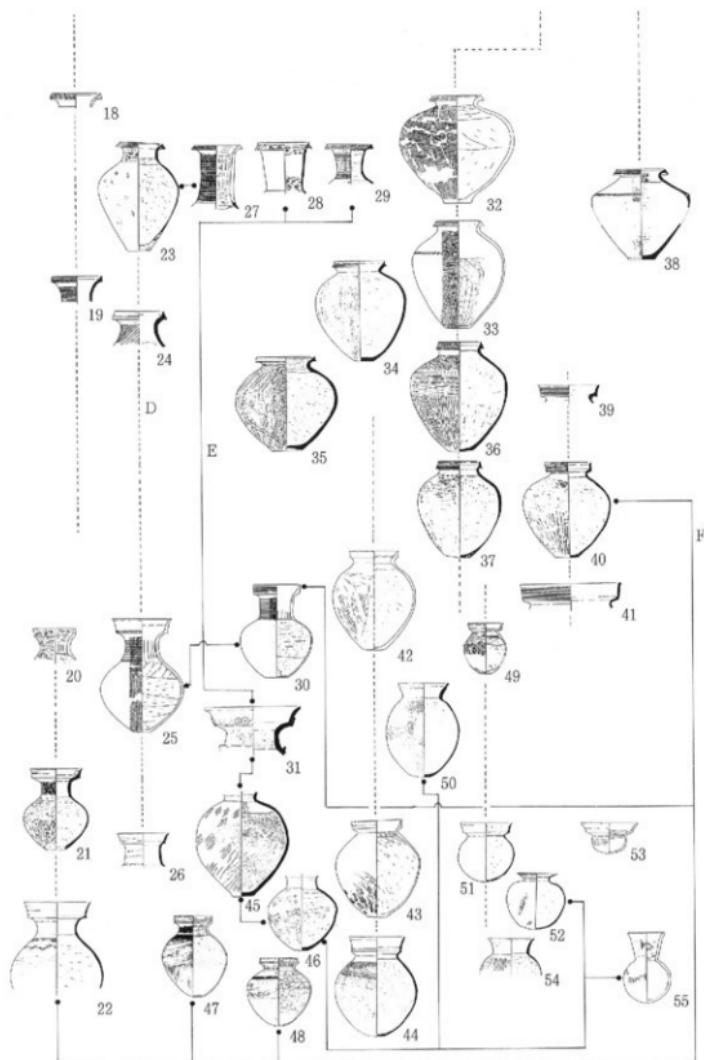


図2の上端は後期初頭に相当し下端は後期終末を表す。各土器の位置はおおむねその間の相対的な新旧に対応しているが、横の線で位置づけられる土器相互の関係は必ずしも土器編年上の区分を示しているわけではない。

図2 後期弥生土器(壺) 縦尺約16分の1

きるようになる。

さらに、伯耆・出雲系譜とみられる土器（ラインF）が後期前葉後半から多く認められるようになる。この波を第1波とし、後期後葉にさらに第2波として伯耆・出雲系譜と考えられる土器群が多く発見されている。明確ではないが、この第1波の時期にはさらに備中北部に起源するのではないかとみられる特徴をもつ個体（図2-34）なども存在する。

後期の壺形土器を中期と対比しもっとも異なる特徴は、その形態の多様さにある。そしてそれは、上述のように上器伝統の起源地の多様さに起因するのみではなく、そのそれぞれの相互作用の結果生み出された変異・変容形の多さにある。

変異に富む後期土器の構成は、後期通有のものでもないことは、岡山南部平野の後期土器のありかたとくらべれば一目瞭然であり、地域特性の一つということができよう。

勿論、中期においても地域的土器が生み出されてくる前提に、多元的な土器起源の存在していたことは当然のことではあるが、地域的变化は先にみたとおり単系的、静的変化と評価できる。中期上器との比較でいうならば、後期の上器は、多元的、動的変化を示しているとみて誤りないであろう。

この中・後期の土器にあらわれた構造の変化は、当時の津山がおかれていた社会的条件に大きくかかわっていたことは疑いなく、後期の土器構造は、たんに周辺部の土器伝統の「影響」で説明しきれるものでもない。このことについては、次号以降で津山の弥生土器2（壺形土器・高杯形土器）、3（器台形上器）を検討したのち評価したい。

掲載上器出典

「高本遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書8 岡山県教育委員会 1975

「沼E遺跡II」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 津山市教育委員会 1981

「高橋谷遺跡」津山市教育委員会が1975～76年にかけて調査。報告書未刊。

「企井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第25集 津山市教育委員会 1988

「京免・竹ノ下遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第11集 津山市教育委員会 1982

「野田遺跡」野田遺跡調査委員会 1984

「ヒシャコ谷遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 津山市教育委員会 1984

「大田十二社遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 津山市教育委員会 1981

「竹田墳墓群」竹田遺跡は発掘調査報告書第1集 銀野町教育委員会 1984

「一貫東遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告書第43集 津山市教育委員会 1992

「稼山遺跡I」久米開発事業に伴う文化財調査委員会 1979

「二宮遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書28 岡山県教育委員会 1979

「権現山遺跡」津山市教育委員会が1976年に調査。報告書未刊。

なお、図2-42（権現山遺跡川土壙）及び55（京免遺跡山上壙）については、本項作成のため文化財センター野上恭子さんに実測をしていただいた。

『日上和田古墳』増補

行田 裕美

日上和田古墳は、は場整備事業に伴い昭和55年5月1日から6月5日まで筆者が担当し、発掘調査を実施した古墳である。その調査報告書は昭和56年3月31日付け『日上和田古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第6集として津山市教育委員会から刊行済みである。その後、調査報告書作成段階で筆者の力量不足のため知り得なかった新たな見を得たのでここに紹介し、調査報告書の増補としたい。

①埋葬主体部

調査段階での埴丘の現状は大きく削り取られており、わずかに埴丘の南側と東側の一部が孤状に遺存するだけであった。当然、主体部も全く失われておりその構造を知るすべはなかった。ただ埴丘の残存部に拳大の石が多量に散乱しているという事実はあった。地元作業員の話によると、耕作時に出たものを捨てたという事であった。案の定、これらの石の中にはガラスやビンの破片も含まれていた。このことから報告書では、これらの石は直接古墳とは関係しないものと結論付けた。しかし、比較的大きさが揃っていたということは気になるところであった。

4年後の昭和59年、河辺公民館の用件で渡辺健治氏に会う機会があり、河辺地区の遺跡の概要について多くの教示を受けた。その中で、本古墳にも触れられ「あれは躰柳墳でえ」という教示を得た。とすればあの石の一部は耕作時に出たものも含まれるであろうが、躰柳を構成していたものも存在していたとすることができる。

②主体部出土遺物

前述のように主体部が遺存しないため当然出土遺物も不明であった。ところが、一部伺い知ることのできる文献資料を津山郷上博物館漢 哲夫氏より複写していただいた。明治33年4月25日付け、考古学会発行『考古』第一編第六號に収録の秋久秀二郎「岡山懸下勝田郡國分寺付近古墳探検の記』がそれである。この中で本古墳に関する箇所を原文のまま抜粋する。

和田塚

「大塚を去る東南數丁の處に孤立せるものを和田塚とす、未だ嘗て之れを發掘したるものなしと雖ども、其中央外方の一部が自然の崩壊に依て得たる器物は決して渺少にあらず、十人の或るものは往年一個の銀鏡を發見せり、余も亦墳中より大小二幅（全形のもの）の轡と一刃の刀（長鰐二尺五寸許）と許多の矢頭・銅鏡・零片等を得たり、蓋し古墳中其埋藏の最も多きものならん」

埴丘の自然崩壊で遺物が出土している。原文に即して整理してみよう。銀環1、轡大1、轡小1、刀1、鐵・冑・鏡片多数が出土したことになる。これらの遺物をほぼ同時期で躰柳を含む河辺上原古墳群（註1）との比較で検討してみよう。

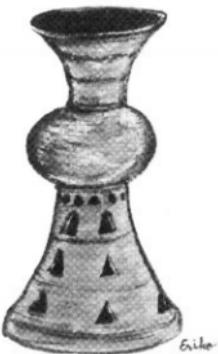
銀環は細いタイプのものであろう。轡の大小というは理解に苦しむが、轡自身はこの時期にはかなり見られるものである。刀は直刀で1m弱のものが多い。鏡は基本的に長頸鏡でまとまって出土することが多い。問題は冑・鏡であるが、比較資料がなく信憑性は定かではないが、遺物の確認もできない今日においては文献の記述を重視する立場をとりたい（註2）。

以上、埋葬施設は躰柳で出土遺物の組成も多少なりとも明らかになり、総体としての日上和田古墳の

姿がおぼろげながら浮かび上がってきた。発掘調査から15年の歳月が経過した。本来、調査報告書に盛り込むべき内容であるが、筆者の力量不足で果たせなかった。ここに追加寄稿することで御寛恕願いたいと思う。

(註1) 小郷利幸『河辺上原遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第54集津市教育委員会 1994年

(註2) 故秋久秀二郎氏の御子息が80歳を越す高齢ではあるが、市内林田に御顯在であることを知った。もしかしてこれらの遺物について何らかの情報を得ることができるかも知れないと思いお話を伺った。しかし、なんら目的を果たすことはできなかった。



長歟山2号墳出土の資料について

坂本 心平

1.はじめに

美作地域では、5世紀末～6世紀中頃にかけて、円墳で木棺直葬などを主体とする一連の群小墳が盛行する（註1）。長歟山古墳群は、日上歟山古墳群、長歟山北古墳群などとともにそれらの古墳群の中の代表的なものとされ、うち1号墳、2号墳の2基が過去に発掘されている。本稿では2号墳出土の遺物について報告する。

2.長歟山2号墳の概要

長歟山古墳群は津市山田町分寺に所在し、吉井川から約1.2km東へ入った丘陵上に立地する（第1図）。古墳は8基が確認されている（第2図）。2号墳は群の中ほどに位置する。群中では最大規模の円墳で、径17m弱、高さ3mを測り、周溝をもつ（註2）。墳丘からは、木棺直葬で覆床をもつ主体部が1基検出されている（註3）。本稿で紹介する遺物のうち、鉄器類は主体部から、須恵器、埴輪は墳丘および周溝からの出土である。他に主体部からは鉄鋸が出土している。

3.遺物

鉄器

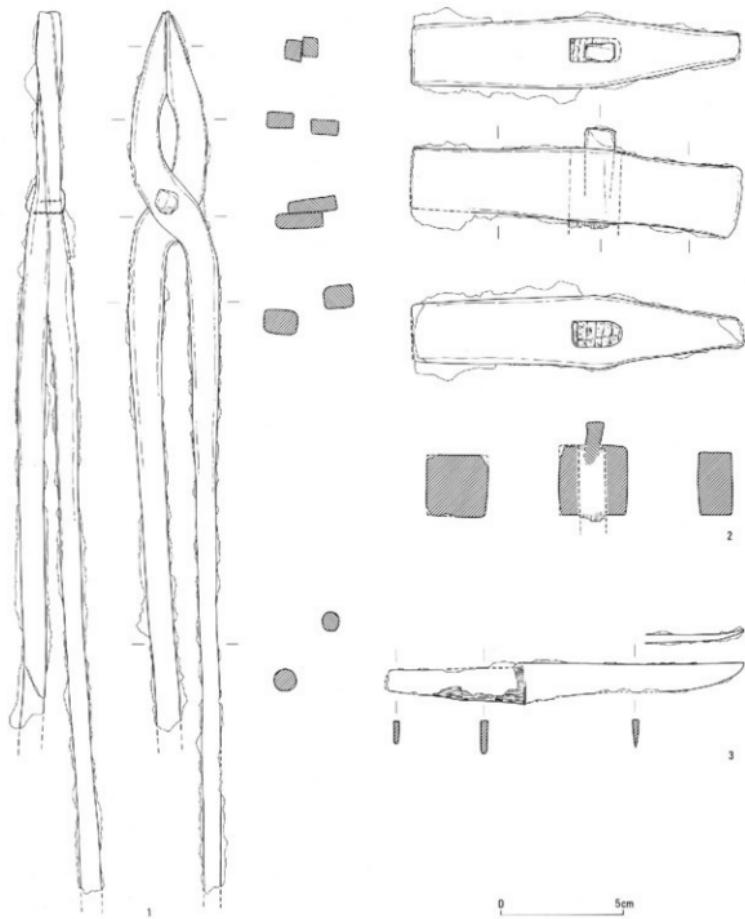
1は鉄針である。残存長36.0cmを測る。2本の鉄棒の先端部を曲げて交差させ、交差部に孔をあけて鉄紙で連結させている。握り部は、ほぼ真っすぐな棒状を呈する。端部から中央部付近までにかけて断面円形を呈するが、そこから連結部付近までは断面隅丸方形となる。交差部付近では両方の棒材とも偏平な断面となっているが、接触面積を大きくすることでぐらつきをおさえているものと考えられる。交差部の孔の径は約6mm、ピンの径は4～5mmで両端を主に挟み部側へ打ち漬しているようである。挟み部は棒材を孤状に曲げ、閉じた状態で先端部内側

3.5cm程が接触するようになっている。挟み部の棒材の断面は、両方とも方形を呈する。

2は鉄鎧である。長さ13.5cm、重量約500gを測る。大きい方の打撃面は2.5cm×2.5cmの正方形を呈し、



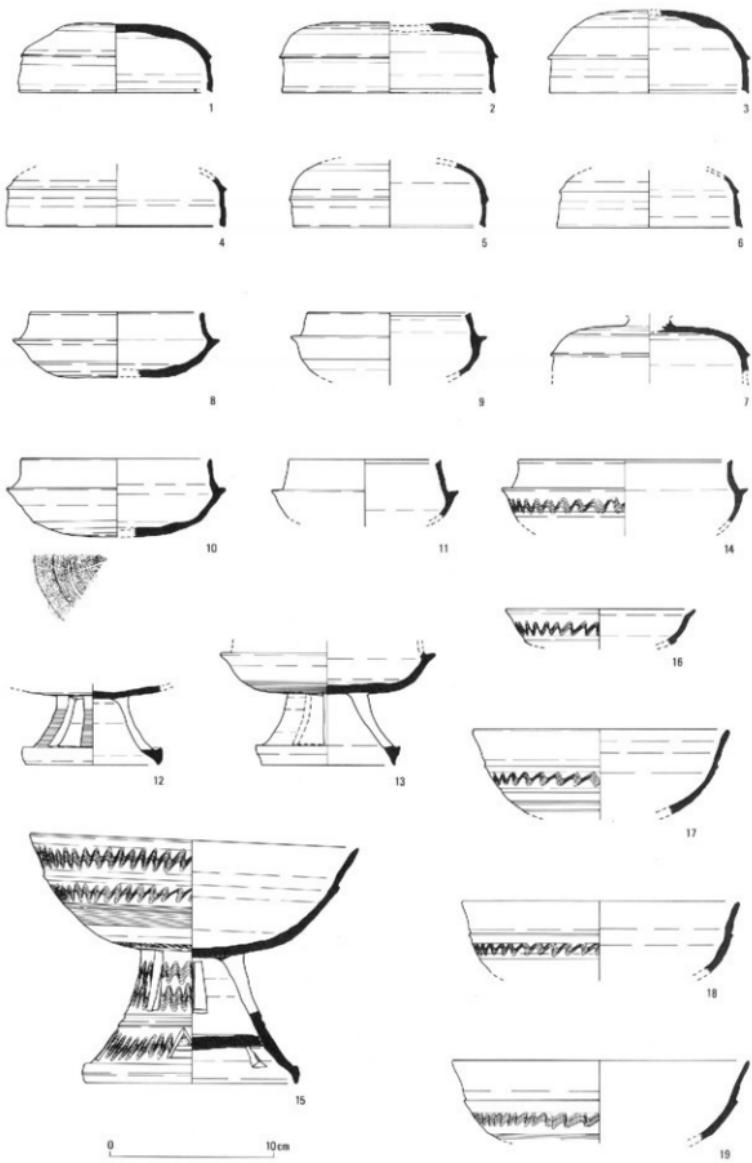
第2図 長歟山・長歟山北古墳群
(S = 1 : 6,000)



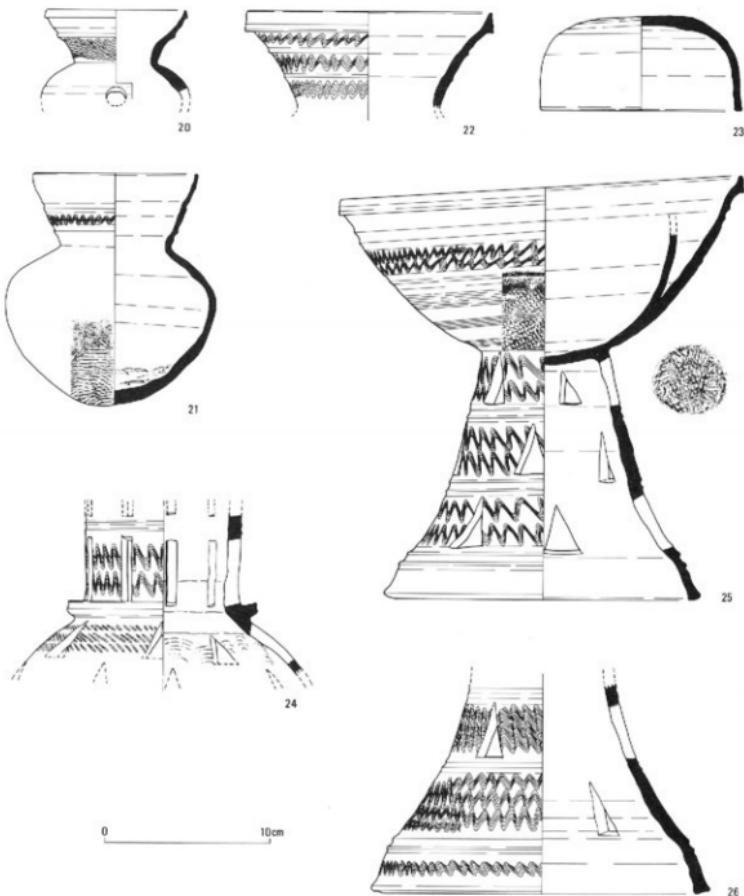
第3図 鉄器実測図 (S = 1 : 2)

中央部付近から幅を減じて逆側の端部では $1.0\text{cm} \times 2.8\text{cm}$ の長方形の打撃面となるようである。中央からやや小さい方の打撃面寄りに $1.0\text{cm} \times 2.0\text{cm}$ ほどの柄孔を有する。柄孔内部には柄の木質が残存し、楔(クサビ)が打ち込まれている。楔は長さ約 3cm 幅 1.1cm 厚さ 0.5cm で、頭部は打撃によりややつぶれている。木柄の断面では、木目が打撃方向に対して直交する向きで用いられている。

3は刀子である。刃部長 9.0cm 、茎長は現状で 5.4cm を測る。銹化のため明らかでないが、刀背側に楔を有するようである。茎部には一部木質が残存し、関部刃部側では木柄の端部が確認できる。目釘穴の有無は銹化のため明らかでない。刃部は、関部から中ほどにかけてかなりの研ぎ減りが認められる。刃部先端は約 1cm ほどが刀背側からみて左へ湾曲している。



第4図 須恵器実測図(1) (S = 1 : 3)



第5図 須恵器実測図(2)

須恵器

1～7は壺蓋である。天井部は、偏平なもの（2、7）と、丸みを帯びてふくらむもの（1、3）がある。天井部と口縁部を分ける稜は短く観さに欠けるものを主体とするが、2、7はやや突出が目立つ。3の稜は突出度は大きいが、全体に不整で鋭さに欠ける。口縁端部はいずれも内傾する面をもつ。7は天井部中央につまみがつく。8～11は壺身である。口縁部はいずれもやや内傾してたちあがり、端部は、丸くおさめるもの（8、10）と、内傾する面をもつもの（9、11）がある。受部は外上方または水平方向にのびるが、いずれも端部の稜は脱さに欠ける。10の底面中央部付近には、ヘラ描きの記号が刻まれている。

12は高环脚部である。台形の透かしを3方にもつが、面取りはみられない。脚端部上側から脚高の約

器種	図番号	法量(cm)	ヘラ割り	色調	焼成	胎土	その他
环 蓋	第4図1	口径 11.8 器高 4.3	左 3 / 5	暗灰色	良好	1.5mm以下の砂粒を含む	
	2	口径 (12.8) 器高 4.3	左 4 / 5	暗灰色	良好	1.5mm以下の砂粒を含む	
	3	口径 12.0 器高 5.1	左 2 / 3	暗灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
	4	口径 (13.2)		青灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	
	5	口径 (11.6) (2 / 3)	左	灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
	6	口径 (11.2)		暗灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	
	7	口径 (12.0) 4 / 5	右	灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	高环の蓋か
环 身	8	口径 (10.5) 器高 4.0	左 3 / 4	灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
	9	口径 (9.9) 4 / 5	左	淡青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
	10	口径 (11.5) 器高 4.8	左 2 / 3	黒灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
	11	口径 (9.1)		青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
高环脚	12	底径 8.0	右	青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
有蓋高环	13	底径 (8.0) 受部径 (13.1)	左	暗灰色	良好	1.5mm以下の砂粒を含む	
	14	口径 (12.8)		淡青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
無蓋高环	15	口径 19.9 器高 15.2 底径 12.9	右	淡青灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	脚部を粘土板で塞ぐ
	16	口径 (11.4)		暗灰色	良好	1mm以下の砂粒を多く含む	内面に自然釉
	17	口径 (15.4)		灰白色 生焼け状		1.5mm以下の砂粒を含む	
	18	口径 (16.7)		青灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	
	19	口径 (17.9)		淡灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	内面に自然釉
瓶	第5図20	口径 8.4 最大径 9.0		淡黄灰色	良好	0.5mm以下の砂粒を含む	口縁部内面に自然釉
	21	口径 9.9 器高 14.2 最大径 12.8		淡灰色	良好	2mm以下の砂粒を多く含む	
直口壺	22	口径 14.7		暗灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	口頭部
蓋	23	口径 12.3 器高 5.8	右	淡黄灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	外面に自然釉 短頭蓋の蓋か
器 台	24	脚部径 (11.1)		淡灰色	良好	2mm以下の砂粒を含む	脚部、凸部上面に自然釉
垂付高环形器台	25	口径 24.4 器高 26.0 底径 19.2		淡青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	
脚 部	26	底径 20.6		淡青灰色	良好	1mm以下の砂粒を含む	

()内の数値は復元値。ヘラ割り部の数値は環蓋天井部、环身底部に対する割りの比率を示す。

表1 須恵器観察表

5分の3ほどの範囲にカキ目を施す。13、14は有蓋高坏である。13は坏部底面の約3分の2ほどにカキ目を施す。脚部は台形の3方透かしである。14は、口縁端部は内傾する面をもち、坏部上部には櫛描き波状文をめぐらせる。15～19は無蓋高坏である。15は高坏形器台とも考えられる。装飾、構造とも他の無蓋高坏と比べて特殊な様相がみられる。坏部は、稜をはさんだ2段の櫛描き波状文、カキ日のほかにも底面に櫛描き原体による連続刺突文をめぐらせる。脚部は中ほどに2本の稜をめぐらせ、その上側には5方に長方形透かしをもち、また下側では5方に三角形透かしをもつ。脚部内側では、三角形透かしにかかる位置が円板によってふさがれている。内部に珠を入れて鈴様の機能をもたせたとも考えられるが、珠の有無については明かでない。16～19は坏部破片である。小型で稜の上部に櫛描き波状文をもつものと、中～大型で稜の下部に櫛描き波状文をもつものの2種類がある。

20は壺である。図示できなかったが、体部最大径付近に櫛描き波状文をめぐらせる。

21は直口壺である。体部外而底部には体部の約3分の1ほどの範囲で平行叩目文がみられ、内面底部付近には当て具痕が残る。

22は広口壺口頭部と考えられる。

23は蓋である。組合わざる器種については明らかでない。天井部は丸く仕上げ、上面には淡緑色の自然釉が一部に残存する。口縁端部はほぼ水平な面となる。

24は器台である。筒状の胴部と、下向きの椀状に開く脚部をもつ。胴部は8方に長方形透かしをもつ。脚部は三角形透かしを6～8方に2段以上もち、外面には櫛描き原体による連続刺突文が3段以上にめぐる。脚部内面は同心円文を粗くなじ消している。脚部外面および凸帯上面には緑褐色の自然釉が一部にみられる。

25は壺付高坏形器台である。壺部は体部以上のみを作りて坏部に貼り付け、底部を坏部と共有している。壺部外面では格子叩目文をナデ消している。坏部は約2分の1に格子叩目文がみられ、その上かららせん状にカキ目を加える。さらにカキ目のらせん部分の上部および下部付近は上からナデを加えている。坏部外面の脚部内側には、爪によるとみられる放射状の連続刺突文が付される。脚部は三角形透かしを5方に3段もつ。

26は脚部である。器種は明らかでない。稜によって幾段かに区切られ、各段は3方に三角形透かしをもつ。各段には櫛描き波状文が3重～4重にめぐるが、いずれも上から下へ、時計回りにらせん状に付される。

埴輪

1、2は口縁部破片である。端部はいずれもごくわずかに外方へ突出する。外面調整は1、2ともナメハケ、内面調整は1がナデ、2がヨコハケである。

3～10は胴部破片である。5、7には透かし孔の一部が残る。外面調整は、タテハケを主体とする。5は小片のためはっきりとはしないがヨコハケのようである。内面調整はいずれもナデであるが、8には一部にヨコハケがみられる。タガの断面は、やや偏平な台形の頂部がくぼんだM字状のものを主体とする。3、4、8のタガ下端部は仕上げ調整を欠くか、不十分で、波状を呈する。4のタガは他のものに比べてシャープな印象を受ける。

11～13は底部破片である。外面は11はタテハケ、12はナメハケである。内面はいずれもナデである。12は外面のみ、11、13は内面、外面ともに底部調整を行う。11内面の底部調整は砂粒の移動を伴い、ケ



第6図 塗輪実測図 ($S = 1 : 2$)

ズリによるものと思われる。11の底径は13.8cmを測る。

塗輪はすべて土師質であるが、焼成、色調については、2種類のものがみられる。1～3、6～13は焼成がややあまく、色調も赤褐色を呈するのに対し、4、5は焼成が堅緻で色調も黄褐色を呈する。黒斑はいずれにもみられない。

4.まとめ

以上、長歓山2号墳出土の遺物についてその概要を述べてきた。最後に、岡山県内出土の古墳時代鍛冶具の集成および須恵器、埴輪について若干の編年上の位置付けを行ってまとめとしたい。

鍛冶具について

岡山県内における古墳からの鍛冶具の出土例は、8遺跡において知られている（表2）。このうち5例が美作地方からの出土であるが、その中でも長歓山2号墳、西吉田北1号墳は直線距離で0.9kmと近接し、5世紀後半～6世紀にかけてこの周辺の地域と鍛冶集団との密接な関わりがうかがえる。このことについては西吉田北遺跡の発掘調査報告書の中で詳しく述べたい。

須恵器について

まず、須恵器の時期について明らかにしておきたい。本墳出土の环坏は大きく2つのグループに分けることができる。一つは天井部が偏平で、外面のヘラ削りは天井部全体の4分の3程度、穂は突出してやや鋭いもの（2、7）、もう一つは天井部が丸みを帯びてふくらみ、外面のヘラ削りは天井部全体の2分の1から3分の2程度で、穂が短く銳さに欠けるもの（1、3、4～6）である。これらの特徴から陶邑の出辺編年（註12）に比定すると、前者がTK23、後者がTK47にそれぞれ対応するものと考えられる。环身もおおむねTK23、TK47の範囲で捉えられるものである。口縁端部に面をもつもの（9、11）と丸くおさめるもの（8、10）があるが、美作地方においてはTK23併行期以降向者が共存していくことが明らかになっている（註13）。

次に出土須恵器の中で特殊なものについてみてみたい。15の無蓋高坏はプロポーション的には他の無蓋高坏に似るが、装飾性が高く、脚の構造も特殊なものである。脚に蓋をして鈴様の機能をもたせる高坏の例は、鳥取県金崎古墳（註14）などにもみられるが、類例は多くないようである。また、脚は2段透かして上段が長方形、下段が三角形という、この段階の高坏としては変則的なものとなっているが、これについては器台脚からの影響が考えられる。25の壺付高坏形器台も他にあまり類例を見ない器形である。この器台は、胎土や焼成が本墳出土の他の須恵器とやや異なり、また格子叩き目文をもつ。格子叩き目文は、朝鮮の陶質土器によく見られるが、須恵器では初現の型式のみに限られる（註15）とされる。近年では初現の型式以外で格子叩き目文をもつ須恵器の例がみられるようであるが、この器台については器形の上からも非陶邑系であることがうかがえ、陶邑以外の生産地との関わりが考えられる（註16）。これら特殊な様相をもつ須恵器については、類例が少ないとあって十分に検討することができなかった。本稿では資料の紹介にとどめ、今後の類例の増加を待ちたい。

古 墳 名	所 在 地	出 土 鍛 治 具	時 期	そ の 他	文 献
船塚古墳	総社市西阿曾	鉄鋤、鉄鎌、鑿、鉄床	5C中頃か それ以後	船立日形古墳 壺穴式石室	註4
西吉田北1号墳	諫山市西吉田	鉄鋤、鑿	5C後半	方墳、箱式石棺	註5
一本松古墳	岡山市北方	鉄鋤、鉄鎌	不明	前方後円墳 壺穴式石室	註6
長歓山2号墳	津山市国分寺	鉄鋤、鉄鎌、鑿	5C末～6C初	円墳、木棺直葬	註7
四つ塚1号墳	真庭郡八束村上長田	鉄鋤、鉄鎌、鑿	6C中頃	円墳、横穴式石室	註8
(伝)竹之内古墳	笠岡市山口	鉄鋤	6C中頃(?)	円墳、横穴式石室	註9
(伝)勝央町内古墳	勝田郡勝央町勝間田付近	鉄鋤	6C末～7C初	横穴墓	註10
ツルギ古墳	苦田郡鏡野町小座	鉄鋤、鉄鎌、鑿(?)	7C後半	横穴式石室(?)	註11

表2 岡山県内古墳出土鍛冶具一覧表

埴輪について

黒斑がみられず、底部破片のいずれにも底部調整がみられるという点で、川西宏幸の円筒埴輪編年（註17）にあてはめれば第V期の特徴を備えているものといえる。図6-5についてはヨコハケの可能性があるが、吉備地方では第V期にもヨコハケの存続が認められ（註18）、津山市周辺でもこの時期に例がある（註19）。ことから特に矛盾はみられない。時期的にはTK23段階以降とされ、本墳出土の須恵器の型式と比較しても矛盾はない。

最後に、本稿の作成にあたっては、渡辺健治氏から多々ご教示をいただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

（註）

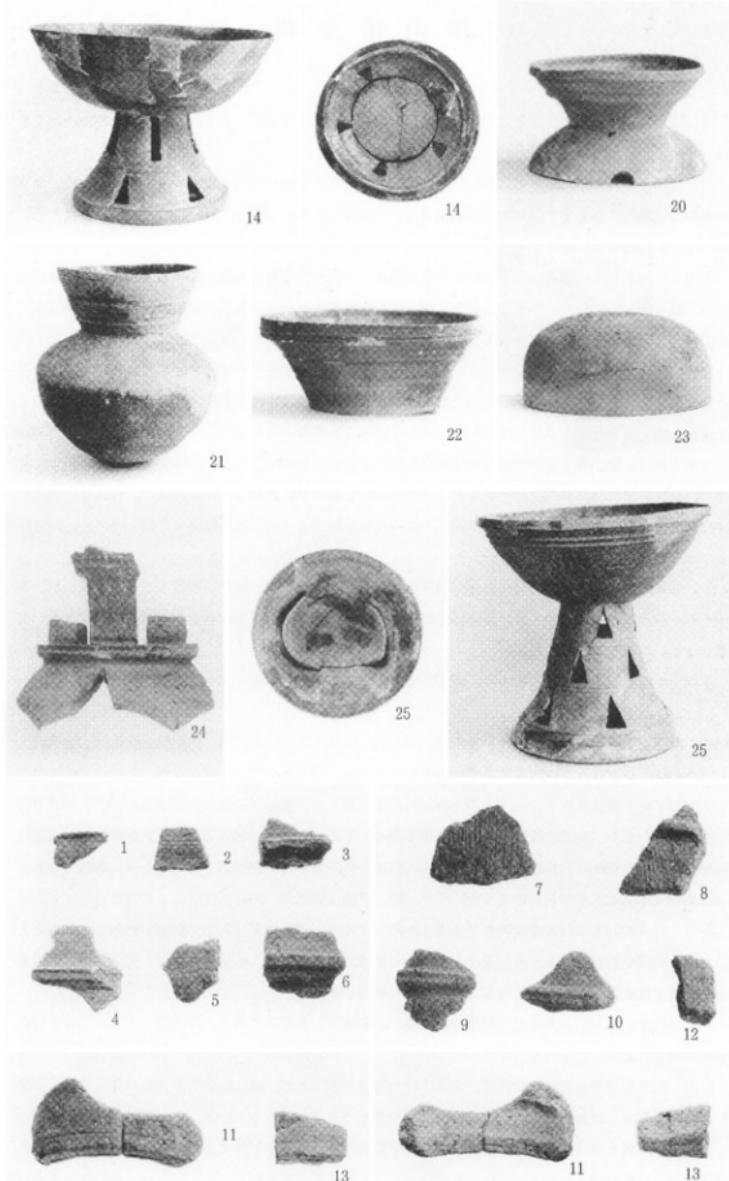
- 1) 安川豊史「古墳時代における美作の特質」近藤義郎編『吉備の考古学的研究』山陽新聞社 1992
「群小墳」という呼称についてもこの論文によった。
- 2) 『津山市史』第1巻 原始・古代 津山市史編さん委員会編 1972
- 3) 渡辺健治氏のご教示による。
- 4) 錦木義昌・間壁忠彦・間壁賀子『絶社市隨庵古墳』総社市教育委員会 1965
- 5) 津山市教育委員会が平成7年度発掘調査を実施。
- 6) 近藤義郎「一本松古墳」「岡山県史」考古資料 岡山県史編纂委員会 1986
- 7) 註2文献、本稿
- 8) 近藤義郎『蔵山西つ塚古墳群』改訂版 八束村 1992
- 9) 西川弘「小形古墳と横穴式石室の普及」『岡山県史』第2巻 原始・古代I 岡山県史編纂委員会 1991。尾上元規氏のご教示による。
- 10) 渡辺健治氏のご教示による。1970年、工事中に発見され、遺物のみ採集されたということである。
本墳出土の鉄鉗より全体に若干小ぶりであったという。
- 11) 鏡野町教育委員会蔵。安川豊史氏、立石盛詞氏のご教示による。
- 12) 田迎昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- 13) 小郷利幸「門の山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第46集』津山市教育委員会 1992
- 14) 註12文献
- 15) 註12文献
- 16) 龜田修一氏のご教示による。
- 17) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 日本考古学会 1978
- 18) 島崎東「円筒埴輪－中・四国」『古墳時代の研究』9 雄山閣 1992
- 19) 才ノ崎1号墳他。中山俊紀「才ノ崎古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津山市教育委員会 1988
(岡出展)

図2（註1）文献より引用。一部改変。



出土遺物(I) 鉄器、須恵器 (番号は各図の番号に対応)

図版 2



出土物(2) 須恵器、埴輪

津山城今昔

中山 俊紀

津山城といえば、鶴山公園として残る石垣群一帯を思い浮かべるが、本来の城郭は市街地中心部を含む、ずっと広範なものであった。

明治初年から外郭の内堀が埋められ、内堀に沿って堀をいただいていた堤が次々と削りとられ、さらに近年では郭内にさまざまなビルが林立することとなって、そこがかつて城郭内であったことなど思い浮かべることもできないほどとなっている。

平成6年末から7年初に、山下にかろうじて残存していた津山城「土恩」跡（かって津山高女時代万里の長城と呼ばれていた）の基盤部掘削工事に立ち会う機会があり（位置は図1に表示）、その時から、津山城郭と現在の町並みがどう対応しているかに興味をおぼえた。

先般、津山郷土博物館に展示されている津山城絵図（松平家愛山文庫中に含まれていたもので、文化6年以前に製作されたものであるという）が、割付に基づき製図された実測図である可能性の強いことを教えられ、これを津市都市計画図におとしてみることをおもひたった。

その方法は、津山郷土博物館発行の「美作の歴史と文化」に掲げられた印刷写真をトレース拡大して都市計画図に重ね合わせたもので、もとより正確は期し難いが、それでも作業過程で、市街地の現況に津山城の痕跡が多く発見され、原図が極めて正確な測量図であったことが推測できる。（但し、田町部分は現況地割と図面のズレが大きい。）

とはいえる、随所でかなり強引な復元線引をせざるをえなかったし、細部の検討もできていないが、市民が町を散策する際、ありし日の津山城を偲ぶ手だてに、この図が多少なりとも参考になればと思い掲載させていただくこととした。

また、その際参考となる事項を以下概述しておく。

門跡 絵図によると外郭には旭門、宮川門、大手門（京橋門）、二階町門、田町門、作事門、北門の計7箇所の城門があり、このうち大手門が浮橋でつながり、掘で断ち切られない旭門、宮川門以外の門は上橋で城下町と連結されていた。大手門のみ石垣で防備され、現地との対応関係でみれば、その大半は撤去されているが、現津山高校同窓会館の棟の段は、この石垣西辺に相当し、南面石垣の全部及び東面石垣の大半は当時の石垣線に一致する。石垣自体も北面は新たに近時積まれているが、南面の全部及び東面の大半は城本来の石垣にまちがいない。現在東面は駐車場、南面は民家により覆われていて目につかなくなっているのは非常に残念である。絵図によると同窓会館下に石垣北面線が東西を横切ることになり、同窓会館下に北面石垣が遺存している可能性も推測される。絵図に従えば、大手門跡は石垣東側の、民家撤去後現在駐車場となっている部分に相当する。

7つの門跡のうち、かろうじて現認できる唯一の遺構がこの部分であり、津山城のよすがとして周辺整備が望まれる。

なお、調査履歴としては、北門部分を都市計画道路が通った際、岡山県教育委員会が発掘調査を実施し、絵図を基にした復元図の北門想定位調査よりやや南で石段を発見している。その石段南に接し柱礎石ぐり石とみられる集石遺構が発見されており、それが門礎石位置をしめすものであるなら、絵図からの想定位置よりやや南よりに北門が存在していたことになるが、確証がえられていないのは残念である。

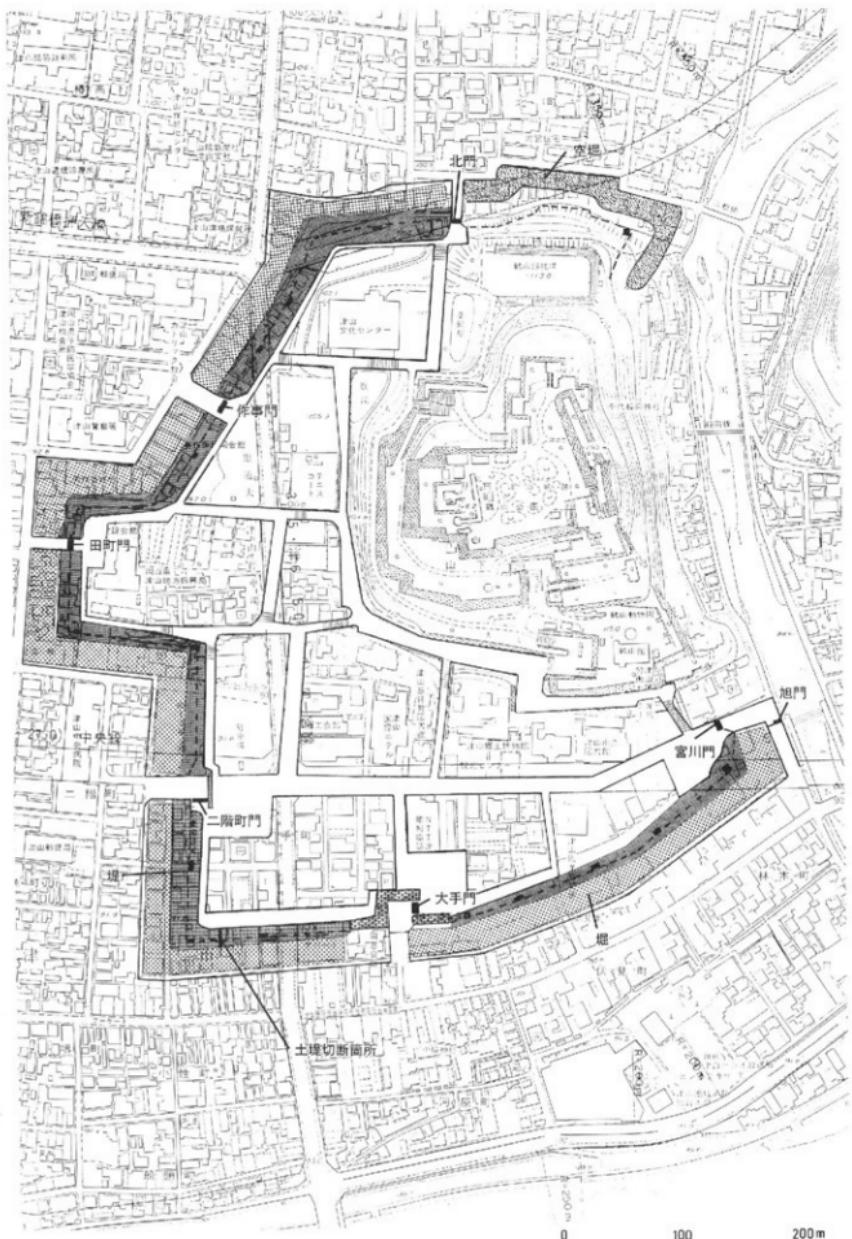


図1 津山城郭復元図

また、宮川門については大橋方向からとった明治初年の写真（右掲写真）が残されていて、その背景に三ノ丸の堀が写っており、その基壇は現在佐藤病院南端の石垣として遺存している。絵図では、基壇石垣の西端に宮川門が位置していたことになっており、写真・絵図・現地をてらし合わせれば、この部分は再現可能といえる。これはいずれも史跡指定地外で、調査を加えれば、充分な復元根拠を積み上げることも可能で、その気になれば整備着手容易でもあり、城下町津山をよみがえらせる重要なポイントとなりえる。



図3 大橋から宮川門方向を見た明治初年の写真

内堀 25m前後あったとされる内堀は全て埋め立てられているが、旭門南手から東西に延びる幅2m程の水路線は絵図の内堀外郭線とよく一致し、また二階町で南北に折れ曲がる水路線も、絵図の内堀外郭線に一致する。

津山地方振興局西側から津山カトリック教会にかけては同様な水路が存在せず、また絵図と現況に大きな隔たりがみられるが、地割線を生かすと図のような内堀推定線が描ける。

また、北外郭の内堀線も必ずしも絵図と現況区割り線が一致しないが、地割と絵図の輪郭線を近づけ、現地形に残る大きな段線を内堀法肩と一応は推定できる。絵図によると、北門から東の内堀は空堀で、北に出っ張る屈曲部の北端線が、現況の道路屈曲部南端線とがほぼ一致するので、この屈曲線と絵図の内堀外郭線を対応させると、この部分も現丘陵の窪みとよく一致する。

なお、文化センター北から田町のカトリック教会にいたる北西コーナーの内堀も水をたたえていたことになっているが、現地形からみて高低差が激しく、一連の水をたたえていたとすると北側の堀は相当深いものであったことになる。正保の絵図には、コーナーやや南に細い土橋が描かれており、あるいはその部分で区切りがあったのかもしれない。

北面東の空堀は埋め立てられ、現在都市計画道路となっていてなんらその痕跡は残されていないが、その東端に先述の丘陵窪が存在する。この窪は、人工の大規模な掘切と現況からも判断され、この部分の外観から、北面の空堀の様子が推測される。なお、空堀のその部分については、津山城築城以前に存在した中世の城の堀をそのまま踏襲しているという見方もある。

堤 内堀の内側には、概ね幅15m～20mほどの堤が描かれており、先年工事に立ち会ったのは山下南西部コーナーや東よりの部分であった。絵図には堤高10数mの記述があり、場所により高低の差があつたろうが、旭門から南辺、西辺及び北辺の北門に至るまでの区間は概ねその程度の土盛りが巡らされていた可能性が強い。文化センター北西下の民家列の位置する大きな段はその名残りとみられ、また先の

大橋から旭門方向をとった写真の前景には堤端の様子や堤上の建物、堀（破線で表示）が写っていて、堤の具体的な様子がよく分かる。

道路 現在の道路が、意外に当時の道路をそのまま受け継いでいることが、絵図と都市計画道路との対応関係から判明する。中央病院から国際ホテル、雇用労働センターに至る道路幅は、津山城時代からほぼそのまま踏襲されていることが分かるし、津山地方振興局南手から赤堀病院南側をぬける細い道路は、当時の面影をよく今にとどめている。

最期に、堤切断所見と断面見取図（図2）を、参考のために付載しておく。

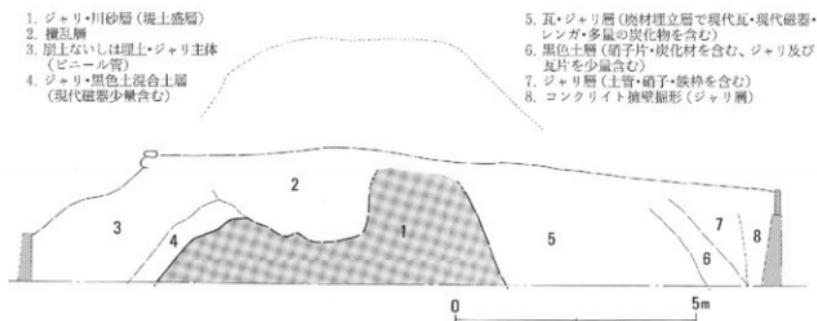


図2 土堤(堤)断面見取図 ($S = 1 : 100$)

断面観察によると、断面の大部分からおびただしい量の瓦片や硝子片・焼材等が発見された。いずれも、昭和時代のものと判断され、対象地点が明治以降たびかさなり掘削、埋立の繰り返されたことが判明した。しかし、断面を清掃すると、中央部幅約7mにわたる、「遺物」を含まない明褐色の川砂・砂利層があらわれ、この部分が本来の堤造存部分ではないかと判断された。残念ながら以上の理由で、本来のその幅、高さについては知る由もないが、堤基盤は、対象地の土壤から推定して、内堀掘削時の川砂や砂利をそのまま積み上げたものであることが明らかとなった。

なお、城郭復元図作成過程で、津山郷土博物館の渡哲夫、神尾齊、尾島治の各氏にお世話になりました。

土 器 復 元 雜 感

岩本えり子

復元作業は、発掘現場から持ち帰った土器を洗う作業から始まります（色々な種類のブラシを使い丁寧に泥を洗い流し乾燥させます）。

土器破片の種類別に分け（須恵器・土師器・弥生土器など）、そして接合です。破片と破片を着けていく作業は、もっとも根気のいる作業で、パズルより難しいと思います。

完成される土器すべての破片がそろっていることはまれで、その破片がどんな土器になるのか、どの部分になるのか、始めはわかりません。色や文様、厚み、調整など手の感触をたよりに目を皿のようにして捜していきます。捜している時は無我の境地になって集中しないと見つかりません。そして、接合の時は接着剤がはみ出さないように、接着剤の量に気をつけて土器の破片の角度を見ながら慎重に接合します。接合する角度が1mm違うだけで全体からすると、ひずみが出てきてしまいます。その部分・部分の接合角度が大切になります。底部、胴部又は口縁の部分になるのか形を考えながら分けて接合します。そして、破片が段々大きなかたまりになって行き、そのかたまりとかたまりが着いてくると全体の形がわかつてきます。着く破片を見つけ、合った時の気持ちは何とも言えないうれしい気持ちです。特に須恵器の破片がピタリと着いた時は特別の気持ちです。この気持ちちは着けた人でないとわからないでしょう。

そして次の段階、破片のない部分に石こうを入れて行く作業に移ります（色々な作業の仕方があると思いますが）。作業の前にうすく溶かした粘土を回りの破片に筆で塗っておきます。石こうを流し込む時土器が汚れないよう石こうが回りの破片に着いても後で取れやすいようにする為です。石こうを入れる部分に沿ってガムテープやアルミ箔を張ります。塗った粘土が乾いたら 石こうを水で溶かしますが、溶かした後適当な柔らかさになるまで待ちます。その加減は流し込む場所や表面調整などにより色々です。水分の多少は勘がたよりです。石こうが乾いたら、カッターや彫刻刀など色々な道具で土器の表面と内側を同じ形と厚さに削っていきます。内側は削りにくく、石こうも流し込みにくい場合もあります。完成した時うれしいのはもちろんですが古代の陶工の持っていた技術に圧倒され又すばらしい土器の形に感動させられます。よく観察いかに元の形に近づけ作っていくかが毎日の課題です。



未来のために

野上 恭子

大分以前に見たテレビですが、ある事で記憶を喪失した主人公が、自分の記憶「過去」を一つ一つ取り戻しながら、サスペンスチャッテで、事件が解決して行くというドラマがありました。結末は主人公の記憶もよみがえり、家族とも出会い、今日の日をまた何事もなかったように迎えることができたという様であった。「自分の過去が分からるのは、闇夜に一筋の光明もなく、手探りで歩く」のと同様、過去は未来への路であり、過去に支えられる事で未来に進んで行けると思うのです。

しかし、明治以後の時代、とくにここ数十年間私たちは自然を含め「自分達の過去」を取り崩すことにより、歩んで来た。子供達は、農村でも都市でも、日の暮れるまで自然のなかで遊んでいた記憶はまだ新しい。

大規模な伐採や造成は、自然環境や景観を変え、家庭生活においても、家具や道具は使い捨てになり、時代を過ごしてきた家屋敷など、先祖伝来の「もの」と出会う機会は少なくなり、核家族などのため、親から子へ・子から孫へと、受け継がれるべき生活文化や、知恵の伝承は、希薄になってきた。現在の生活において、便利さや豊かさなどの文明の利器をすべて否定する説には行かないが、進歩と引き換えに犠牲となり失ってきたものもまた大きい。「自分の過去を知る」すなわち先人達の過去を学ぶことは将来のため、次の世代のために必要かつ有益なことである。

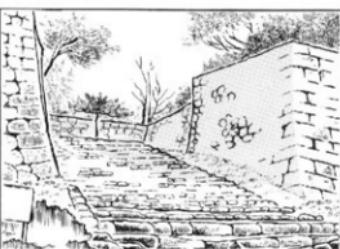
たとえば、江戸時代 物質的にはいまのように、豊かとは言えないけれど、その不足分を徹底したリサイクルで補っていた。たとえば、し尿を含めかまどの灰にいたるまで出るごみはすべて有機物として再利用されていた。先人が残してきた環境や物質を崩すことなく自然を大切にしながら生活は営まれていた。

もっと古く、繩文時代、自然環境は、今と比べようなく厳しい時代であったろう。

しかし、生活は自然の移り変わりに従いその恵みに感謝し自然と一緒に生活していた。獣を捕る矢は、狩りの道具であって決して「人間」を傷つけ殺すための、武器ではなかったはずだ。またそのころは戦争・差別・不平等という忌まわしいものもなかったであろう。

しかし過去はすべてプラスの面だけでなくマイナスの面もある。弥生時代以降多量の武器、兵器はつくり出され、その戦いの跡も現在目の当たりにできる。この点に、謙虚に目を向ければ歴史的文化財は、すべてをつつみ込んでいま、私たちに語りかけている。それに気付くでしょう。過去の歴史のうえに現在があり、また未来がある。

歴史的文化財を保存し保護する事は、私達将来のため大切な義務であろう。



年報
津山弥生の里

第3号（平成6年度）

平成8年3月31日

発行 津山市教育委員会

津山弥生の里文化財センター

岡山県津山市沼600-1

印刷 株式会社 三 勝

岡山県津山市高野山西2115-15
